

若宮 1 号墳

山口堰堤 3 号墳範囲確認調査

例 言

1. 本編は、愛知県瀬戸市若宮町に所在する若宮1号墳（遺跡番号 03872：瀬戸市教育委員会 1997『瀬戸市内遺跡詳細分布調査報告書』）の発掘調査報告、山口堰堤3号墳（県遺跡番号 02108）の範囲確認調査報告である。
2. 若宮1号墳の発掘調査、山口堰堤3号墳の範囲確認調査は、一般国道248号線（瀬戸環状東部線）道路改良工事にかかる事前調査として、愛知県建設部道路建設課名古屋東部丘陵工事事務所より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター（当時、現公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）が実施した。
3. 調査期間と調査面積は、若宮1号墳が平成18年8月から平成19年3月で270㎡、山口堰堤3号墳範囲確認調査が平成18年8月で50㎡である。
4. 調査担当者は、小澤一弘（主査）、早野浩二（調査研究員）である。
5. 発掘調査にあたっては、次の各関係機関のご指導とご協力を得た。
愛知県教育委員会生涯学習課文化財保護室・愛知県埋蔵文化財調査センター
愛知県建設部道路建設課名古屋東部丘陵工事事務所 瀬戸市教育委員会・財団法人瀬戸市文化振興財団
6. 若宮1号墳の発掘調査、山口堰堤3号墳の範囲確認調査において、有限会社山武考古学研究所より調査業務全般の支援を受けた。支援体制は以下の通りである。
黒岩拓也（現場代理人） 千葉孝之（調査補助員） 安藤貢一（測量技師）
また、山口堰堤3号墳の横穴式石室の測量業務は株式会社二友組に委託した。
7. 発掘調査、報告書作成の過程で、次の各氏、各機関からご指導、ご協力を得た。
青木 修 浅田博造 伊藤秋男 伊藤陽肇 岩井 理 柴垣勇夫 武藤忠司 森 泰通
財団法人瀬戸市文化振興財団 瀬戸蔵ミュージアム 株式会社 CUBIC
8. 本編の執筆は、第5章（1）をパレオ・ラボAMS年代測定グループ、同（2）を黒沼保子（パレオ・ラボ）、それ以外を早野浩二が担当した。
9. 発掘調査および本書で使用した座標は、国土座標第Ⅶ系に準拠した。ただし、表記は旧測地系（日本測地系）による。
10. 本編で使用する土層の色調については、『新版標準土色帳』を参考に記述した。
11. 発掘調査の記録（実測図、写真等）は、公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センターで保管している。なお、若宮1号墳の略記号は「2SWK06」である。
12. 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方 802-24
13. 本編の編集は早野浩二が担当した。

目次

第1章 調査の概要.....	1
第2章 周辺の環境.....	2
(1) 地理的環境.....	2
(2) 歴史的環境.....	2
第3章 若宮1号墳.....	8
(1) 立地と現況.....	8
(2) 調査の経過と方法.....	8
(3) 墳丘と周溝.....	10
(4) 埋葬施設.....	14
第4章 山口堰堤3号墳範囲確認調査.....	18
(1) 立地と現況.....	18
(2) 既往の調査と出土遺物.....	18
(3) 範囲確認調査の経過と方法.....	20
(4) 範囲確認調査の結果.....	21
(5) 埋葬施設.....	24
第5章 分析・考察.....	26
(1) 若宮1号墳の放射性炭素年代測定.....	26
(2) 若宮1号墳出土炭化材の樹種同定.....	28
(3) 若宮1号墳の石室と墳丘の構築過程.....	30
(4) 若宮1号墳と山口堰堤3号墳の横穴式石室の系譜.....	32
第6章 まとめ.....	36
(1) 若宮1号墳.....	36
(2) 山口堰堤3号墳範囲確認調査.....	36
(3) 結び.....	36
写真図版.....	37

挿図目次

第1図	古墳の位置	1
第2図	瀬戸市の地形 (1:200,000)	2
第3図	周辺の遺跡と古墳 (1:25,000)	3
第4図	調査区配置図 (1:5,000)	4
第5図	塚原古墳群出土遺物 (1:4)	4
第6図	若宮遺跡出土遺物 (1:4)	7
第7図	調査前地形測量図 (1:200)	10
第8図	横穴式石室検出状況 (1:100)	11
第9図	墳丘平面図 (1:100)	12
第10図	墳丘断面図 (1:100)	13
第11図	列石平・立面図 (1:50)	13
第12図	横穴式石室計測値	14
第13図	横穴式石室 (1:50)	15
第14図	基底石・墓壇 (1:50)	16
第15図	床面検出・遺物出土状況 (1:50)	17
第16図	出土遺物 (1:4)	17
第17図	墳丘測量図 (1:200)	19
第18図	伝山口堰堤北古墳・ 山口堰堤1号墳出土遺物 (1:4)	20
第19図	試掘坑配置・墳丘復原図 (1:200)	22
第20図	試掘坑平面・土層断面図 (1:100)	23
第21図	T.T.05出土遺物 (1:4)	23
第22図	横穴式石室計測値	24
第23図	横穴式石室測量図 (1:50)	25
第24図	若宮1号墳の構築過程	31
第25図	穴田11号墳の墳丘と横穴式石室	31
第26図	擬似両袖式石室の系譜	33
第27図	関連する古墳の位置と石室の開口方向	34
第28図	石室の平面形の比較 (1:100)	34

挿表目次

第1表	周辺古墳一覧表	5
第2表	測定試料及び処理	27
第3表	放射性炭素年代測定と暦年較正の結果	27
第4表	樹種同定結果一覧	28

本文写真目次

写真1	高塚山1号墳の竪穴系横口式石室	6
写真2	矢穴が穿たれた石材 (高塚山3号墳)	6
写真3	調査前状況	9
写真4	調査風景	9
写真5	調査前状況	20
写真6	調査風景	21
写真7	出土材の顕微鏡写真	29

写真図版目次

若宮1号墳遠景	39
若宮1号墳全景	40
若宮1号墳墳丘	41
若宮1号墳横穴式石室検出状況	42
若宮1号墳横穴式石室全景	43
若宮1号墳横穴式石室部分	44
若宮1号墳横穴式石室の大きさの比較	44
若宮1号墳の墳丘断面と墓壇断面	45
若宮1号墳横穴式石室解体状況	46
若宮1号墳出土遺物	46
山口堰堤3号墳範囲確認調査1	47
山口堰堤3号墳範囲確認調査2	48
山口堰堤3号墳範囲確認調査出土遺物	48
山口堰堤3号墳遠景	49
山口堰堤3号墳近景	49
山口堰堤3号墳横穴式石室	49
横穴式石室合成写真	50
横穴式石室全景	50
山口堰堤3号墳横穴式石室部分写真1	51
山口堰堤3号墳横穴式石室部分写真2	52

第1章 調査の概要

若宮1号墳は瀬戸市若宮町1丁目（北緯35度12分14秒・東経137度6分45秒）、山口堰堤3号墳は同2丁目（北緯35度12分9秒・東経137度6分40秒）に所在する。

古墳の位置

古墳が所在する瀬戸市は名古屋市北東約20kmに位置する13万人余の人口を擁する愛知県の中規模都市である（第1図）。市域の面積は111.61㎢で、その多くは山地・丘陵地によって占められる。丘陵地帯には窯業原料となる良質の陶土を多く含む瀬戸層群があり、市域は「せともの」のまちとして、古くから窯業が栄えた。そのことは、市域に密集して分布する窯業生産遺跡が端的に示している。

愛知県教育委員会は、一般国道248号線（瀬戸環状東部線）道路改良工事（事業主体愛知県建設部道路建設課名古屋東部丘陵工事事務所）に伴い、事業区域内に位置する若宮1号墳の発掘調査、山口堰堤3号墳の範囲確認調査を財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター（当時、現公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター）に委託した。調査期間と調査面積は、若宮1号墳が平成18年8月から平成19年3月で270㎢、山口堰堤3号墳範囲確認調査が平成18年8月で50㎢である。

調査の経緯

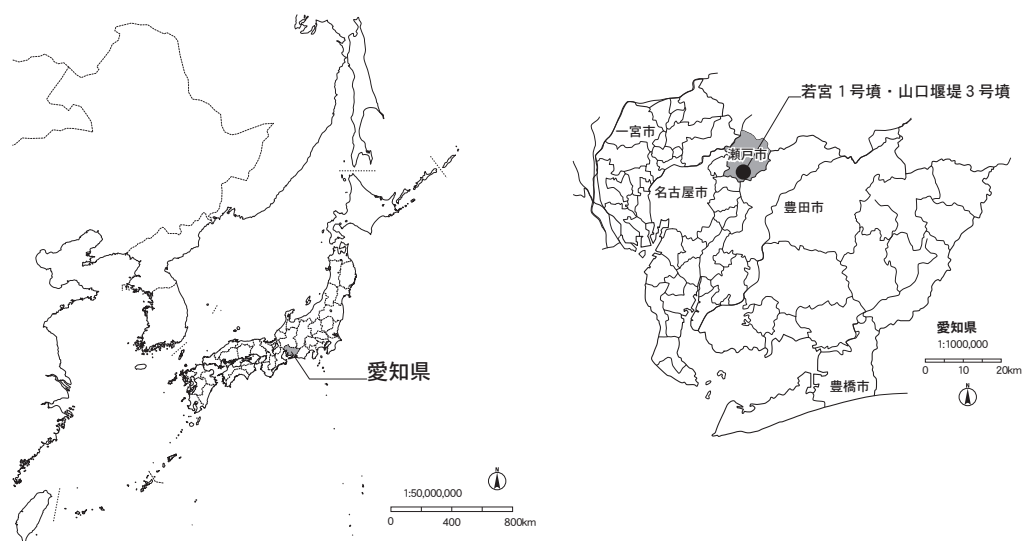
調査期間・面積

若宮1号墳と山口堰堤3号墳範囲確認調査の出土遺物の洗浄は、平成18年度中に発掘調査と併行して実施した。出土遺物の実測、写真撮影、収納等の整理作業、山口堰堤3号墳の横穴式石室の測量調査、報告書の執筆、編集は平成22年度中に実施し、平成24年3月に本書を印刷・刊行した。

整理・報告

文献

- 早野浩二2007「若宮1号墳」『平成18年度愛知県埋蔵文化財センター 年報』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
早野浩二2007「山口堰堤3号墳範囲確認調査」『平成18年度愛知県埋蔵文化財センター 年報』財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター



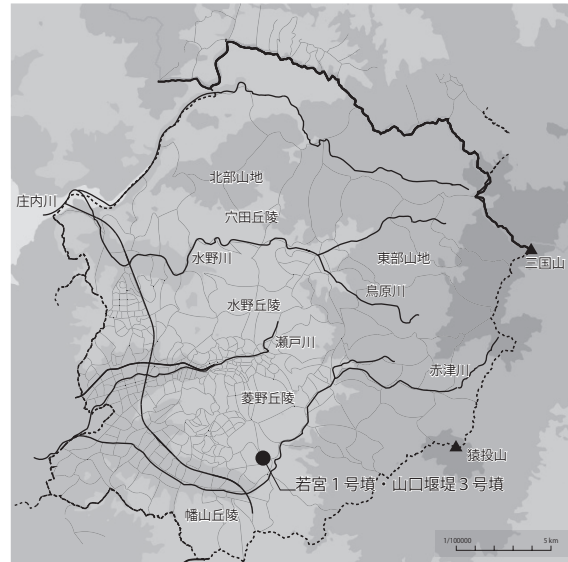
第1図 古墳の位置

第2章 周辺の環境

(1) 地理的環境

地形

三国山（標高701m）と猿投山（標高629m）から西に派生する尾張東部丘陵は、北から穴田丘陵（水野川以北）、水野丘陵（水野川・瀬戸川間）、菱野丘陵（瀬戸川・矢田川間）、幡山丘陵（矢田川以南）と呼称される。若宮1号墳と山口堰堤3号墳、その周囲の塚原古墳群、高塚山古墳群等の古墳群は、矢田川右岸、菱野丘陵の南東端に分布する（第2図）。



第2図 瀬戸市の地形 (1:200,000)

地質

菱野丘陵は、花崗岩類を基盤とする。地表部分は矢田川累層の水野砂礫層に覆われ、若宮1号墳や山口堰堤3号墳を含む周辺の古墳群は、水野砂礫層を基盤として構築されている。丘陵を流下する河川沿いには花崗岩の風化帯の露頭があり、埋葬施設の横穴式石室に利用された石材もこの露頭から供出されたのであろう。

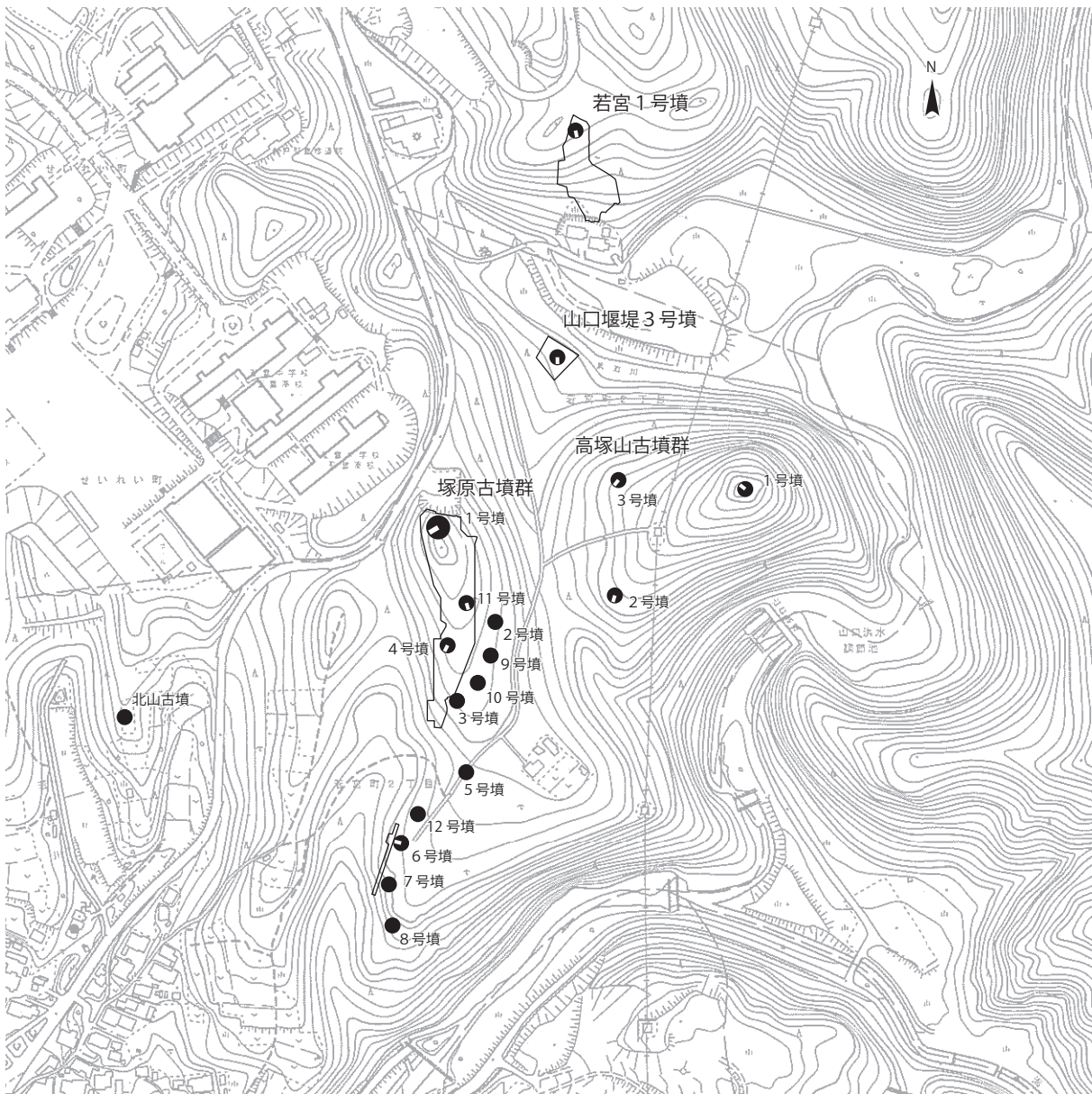
(2) 歴史的環境

周辺の遺跡

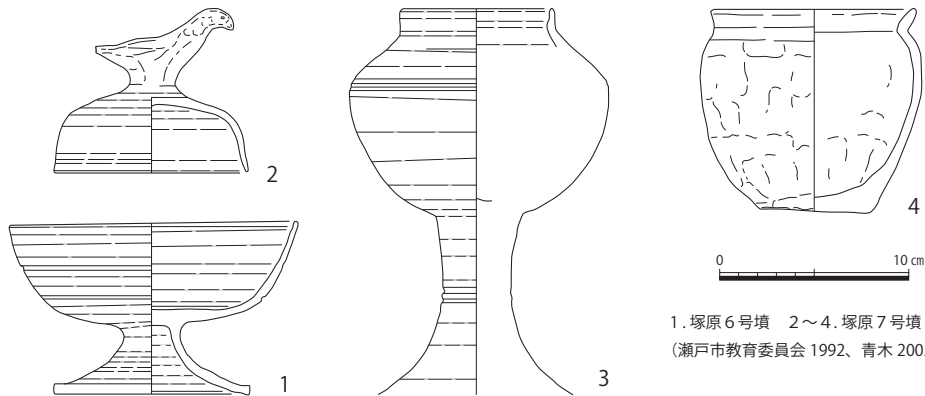
古周辺には縄文・弥生時代の遺跡として、大坪遺跡、大坪西遺跡、大六遺跡、吉田遺跡、吉野遺跡等、古墳時代の遺跡として、吉田奥遺跡等がある。対岸の丘陵斜面に立地する吉田奥遺跡は昭和63年に調査され、古墳時代中期の鍛冶工房を含む古墳時代前・中期の竪穴建物4棟が検出されている。また、吉野遺跡では、大規模な柵状の遺構が検出されている。柵状遺構が設置された時期は不確かながら古墳時代と推測される。その他、大六遺跡においても、古墳時代の竪穴建物が検出されている（第3図）。

若宮遺跡

若宮1号墳や山口堰堤3号墳を含む矢田川流域の古墳群に関連する古墳時代後期から古代の遺跡については不明な部分が多いが、古墳が分布する谷間から広がる沖積地に立地する若宮遺跡においては、昭和30年代の土地改良事業に伴って弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世の各時代の遺物が出土している（第6図）。出土遺物からは、弥生時代後期に遺跡が本格的に形成され、古墳時代から古代を通じて遺跡が断続的に継続したことが推測される。出土遺物中に古代瓦が含まれている点は、付近に古代寺院が造営されていたことを示唆し（岡本2006）、出土遺物中の須恵器火舎（第6図14）も古代寺院に関連する可能性がある。平城宮出土木簡にみる「山田郡山口郷」との関連が想起されるところである。また、隣接する矢形遺跡においても、包含層中を中心として古墳時代から古代の遺物が出土している。



第4図 調査区配置図 (1:5,000)



1. 塚原6号墳 2~4. 塚原7号墳
(瀬戸市教育委員会 1992、青木 2005 より作成)

第5図 塚原古墳群出土遺物 (1:4)

第1表 周辺古墳一覧表

古墳名	所在地	現況	墳形・規模	埋葬施設	石室 残長	玄室 長	玄室 幅	出土遺物	時期	備考
万徳寺1号墳	瀬戸市塩草町	宅地	円墳	横穴式石室						滅失、詳細不明
万徳寺2号墳	瀬戸市塩草町	宅地	円墳	横穴式石室						滅失、詳細不明
万徳寺3号墳	瀬戸市塩草町	宅地	円墳	横穴式石室						滅失、詳細不明
塩草1号墳	瀬戸市塩草町	山林	円墳・径14.5m	横穴式石室						平成18年試掘調査
塩草2号墳	瀬戸市塩草町	山林	円墳							特定不能、滅失か？
塩草3号墳	瀬戸市塩草町	山林	円墳							特定不能、滅失か？
若宮1号墳	瀬戸市若宮町1丁目	山林	円墳・径10m	横穴式石室 (擬似両袖)	6.2	3.1	1.4	須恵器	H-44~H-50	山口堰堤北古墳と同じ？
山口堰堤3号墳	瀬戸市若宮町2丁目	荒地	円墳・径14~15m	横穴式石室 (擬似両袖)	4.9	3.5	2	須恵器、大刀、鉄鏃	H-61~H-44	山口堰堤1号墳と同じ？ 昭和41年調査
高塚山1号墳	瀬戸市若宮町2丁目	山林	円墳・径17.5m	縦穴系横口式 石室		3.5	1.1	須恵器、馬具、鉄鏃、刀子	H-61	昭和31年調査
高塚山2号墳	瀬戸市若宮町2丁目	山林	円墳・径17m	横穴式石室				須恵器・土師器	H-61~H-44	昭和31年調査
高塚山3号墳	瀬戸市若宮町2丁目	山林	円墳・径20m	横穴式石室 (擬似両袖)	5.6	3.8	2.3	須恵器、金環、鉄製品	H-61~H-44	昭和31年調査
塚原1号墳	瀬戸市若宮町2丁目	山林	円墳・径18m	横穴式石室 (擬似両袖)	7.3	5	2.3	須恵器、金環、鉄製品	~H-44	昭和41年・平成18年調査
塚原2号墳	瀬戸市若宮町2丁目	山林	円墳・径18m	横穴式石室 (擬似両袖)	7.2	4.1	2		H-44~H-50	
塚原3号墳	瀬戸市若宮町2丁目	山林	円墳・径16m	石材の露出				須恵器	H-44~H-50	昭和41年調査
塚原4号墳	瀬戸市若宮町2丁目	山林	円墳・径10m	横穴式石室 (擬似両袖)	4.7	2.6	1.2	須恵器、金環、鉄片、 青銅製品、ガラス小玉	H-44~H-50	平成18年調査
塚原5号墳	瀬戸市若宮町2丁目	山林	円墳・径12m	石材の露出				須恵器		
塚原6号墳	瀬戸市若宮町2丁目	山林	円墳・径10m	横穴式石室 (擬似両袖)	4.9	2.6	2	須恵器、大刀、鉄釘、金環	H-50	昭和41年調査
塚原7号墳	瀬戸市若宮町2丁目	山林	円墳・径10m	横穴式石室				須恵器・土師器		昭和41年調査
塚原8号墳	瀬戸市若宮町2丁目	山林		石材の散乱						滅失か
塚原9号墳	瀬戸市若宮町2丁目	山林	円墳	石材の露出						平成12年試掘調査
塚原10号墳	瀬戸市若宮町2丁目	山林	円墳・径10m	横穴式石室				須恵器		平成12年試掘調査
塚原11号墳	瀬戸市若宮町2丁目	山林	円墳・径8m	横穴式石室	2.8		1.4	須恵器・土師器、金環	I-17	平成18年調査
塚原12号墳	瀬戸市若宮町2丁目	山林	円墳・径15m	石材の露出						
北山古墳	瀬戸市若宮町2丁目	山林								特定不能
山口八幡1号墳	瀬戸市矢形町	山林	円墳	横穴式石室？				須恵器、鉄鏃	H-50	
山口八幡2号墳	瀬戸市八幡町	山林	円墳・径15~20m							
山口八幡3号墳	瀬戸市矢形町	山林	円墳・径10m							
本泉寺古墳	瀬戸市矢形町	宅地	円墳							
矢形古墳	瀬戸市矢形町	宅地	円墳							滅失、詳細不明
菱野熊野神社古墳	瀬戸市東菱野町	宅地	円墳							
大六古墳	瀬戸市南山口町	宅地	円墳							滅失、詳細不明
南高塚山1号墳	瀬戸市上之山町3丁目	山林	円墳							
南高塚山2号墳	瀬戸市上之山町3丁目	山林	円墳							
南高塚山3号墳	瀬戸市山口町	その他	円墳	横穴式石室？						滅失、詳細不明
宮地1号墳	瀬戸市上之山町2丁目	山林	前方後円墳・長16m							
宮地2号墳	瀬戸市上之山町2丁目	その他	円墳・径15m							
宮地3号墳	瀬戸市上之山町2丁目	その他	円墳・径13m							
吉田2号墳	瀬戸市上之山町2丁目	道路	円墳・径12m	縦穴系横口式 石室	5.2	3.1	1.5	須恵器・土師器、鉄鏃、鉄鏃、 鉄斧、刀子、管玉、ガラス小玉	H-44	昭和62年調査、移築保存
吉田4号墳	瀬戸市上之山町2丁目	山林	円墳	横穴式石室				須恵器、鉄鏃、金環		昭和48年調査
吉田2号墳	瀬戸市吉野町	山林	円墳・径12m	縦穴系横口式 石室	4.8	3.3	1.1	須恵器、大刀、鉄鏃、刀子、 ガラス小玉	H-61	昭和62年調査
吉田奥3号墳	瀬戸市吉野町	山林	円墳・径13.5m	横穴式石室	2.6		1.4	須恵器、鉄鏃、刀子	H-61~H-44	昭和62年調査、滅失
吉田奥5号墳	瀬戸市吉野町	荒地	円墳					須恵器	H-61	昭和62年調査
来姓1号墳	豊田市八草町来姓	大学構内	円墳・径15m	横穴式石室 (擬似両袖)	5.4	2.8	1.9	須恵器、刀子、金環	H-61~H-44	昭和40年調査、滅失
来姓2号墳	豊田市八草町来姓	大学構内	円墳	横穴式石室	2.9		1.9	須恵器	H-44	昭和40年調査、滅失
来姓3号墳	豊田市八草町来姓	大学構内	円墳	横穴式石室	1.8		1.8	須恵器、金環	H-61~H-44	昭和40年調査、滅失
来姓4号墳	豊田市八草町来姓	大学構内	円墳・径12m	横穴式石室 (擬似両袖)	5.5	2.7	1.7			昭和40年調査、滅失
来姓5号墳	豊田市八草町来姓	道路	円墳	横穴式石室 (無袖)	3	2.9	1.2	須恵器、大刀、刀子、金環	H-61	昭和40年調査、滅失
来姓6号墳	豊田市八草町来姓	道路	円墳	横穴式石室	4		1.6	須恵器・土師器	H-44~H-50	昭和40年調査
来姓7号墳	豊田市八草町来姓	山林	円墳	横穴式石室 (擬似両袖)	3.5	2.8	1.6	須恵器	H-44	昭和40年調査
来姓8号墳	豊田市八草町来姓	山林	円墳・径10m	縦穴系横口式 石室	3.1	2.9	1	須恵器・土師器、金環、 切子玉、ガラス小玉	H-61~H-44	昭和40年調査
来姓9号墳	豊田市八草町来姓	山林	円墳・径10m	縦穴系横口式 石室	3.1	2.8	1	須恵器	H-61~H-44	昭和40年調査
松崎古墳	豊田市八草町松崎	山林	円墳・径14m							

する古墳時代後期以降の古墳であることが明らかとなった。なお、高塚山1号墳、吉田奥2号墳、吉田2号墳の横穴式石室は竪穴系横口式石室である(写真1)。調査後に滅失した古墳も多いが、吉田2号墳は移築保存され、塚原1号墳も移築保存されることが決定している。

石室石材の利用

古墳の周辺に散乱する石材には矢穴が穿たれたものも散見される(写真2)。近世以降に横穴式石室の石材がしばしば切り出されて利用されていたようである。矢穴が穿たれた石材は若宮1号墳の調査においても確認されている。

周辺の窯跡

古代以降の遺跡については、本書で報告する塚原1号窯跡に加えて、広久手窯跡群、南山窯跡群、山口八幡窯跡群など、灰釉陶器、山茶碗、古瀬戸などを焼成した窯跡群が周囲に多数分布する(本書の「塚原1号窯跡」を参照)。



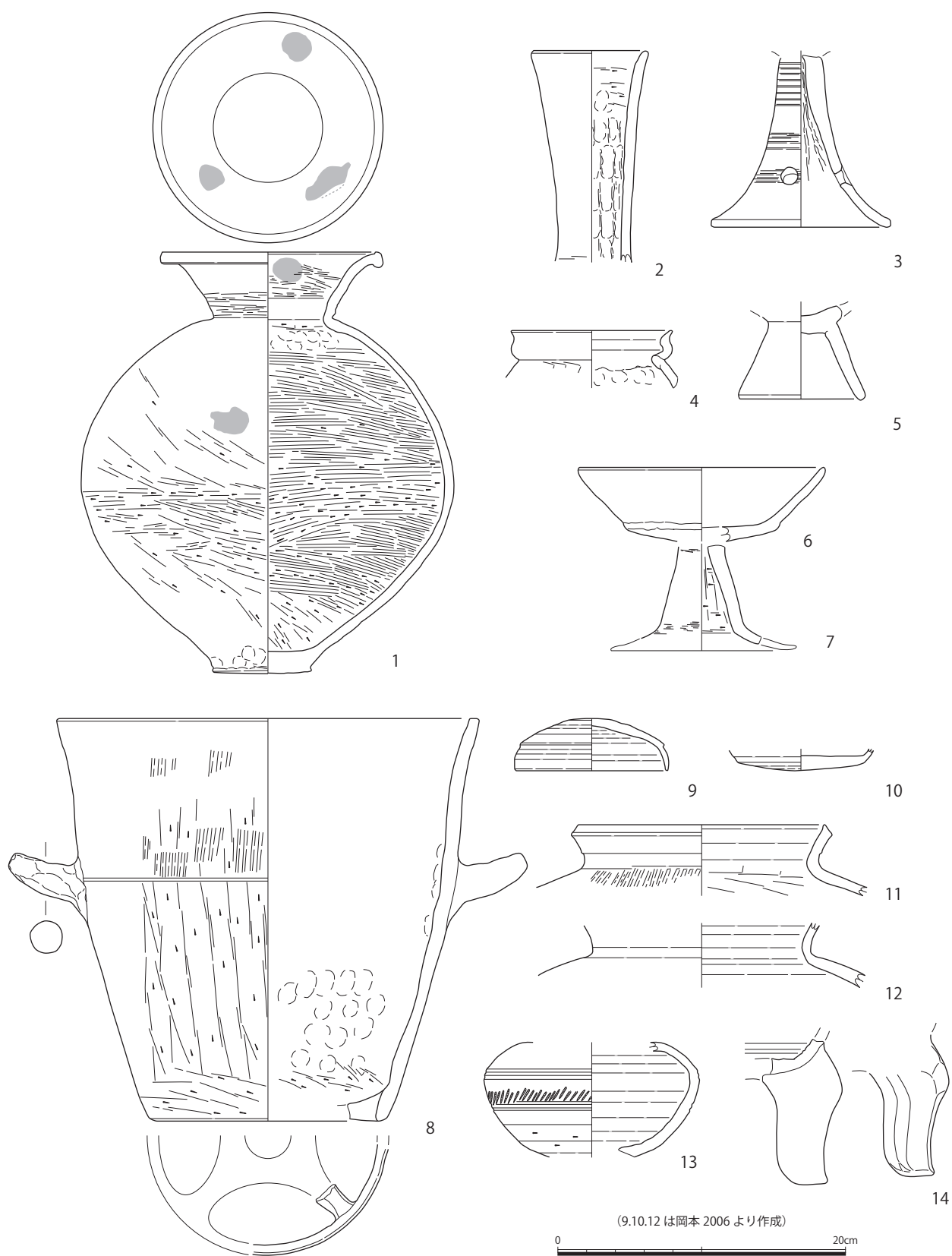
写真1 高塚山1号墳の竪穴系横口式石室



写真2 矢穴が穿たれた石材(高塚山3号墳)

文献

- 瀬戸市教育委員会1963『大六遺跡』
- 猿投町史編纂委員会1969『来姓古墳群・上向イ田古窯址群』
- 瀬戸市教育委員会1992『上之山』
- 瀬戸市教育委員会1997『瀬戸市内遺跡詳細分布調査報告書』
- 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター2001『広久手18・20・30号窯跡』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第23集
- 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター2004『吉野遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第125集
- 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター2005『吉野遺跡』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第29集
- 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター2005『矢形遺跡』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第30集
- 青木修2005「瀬戸市の古墳Ⅱ矢田川流域の古墳群について(上)」『研究紀要』第12輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 岡本直久2006「瀬戸市内出土の古瓦品野中部遺跡及び若宮遺跡出土遺物の整理報告」『研究紀要』第13輯 財団法人瀬戸市文化振興財団
- 財団法人瀬戸市文化振興財団2009『塚原古墳群』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第38集
- 財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター2009『大坪西遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第157集



注記：3.9.10.12「山口城」 4.11.「若宮」 5.6.7「山健工場」 8.「山口土地改良 今林前 石田」 13.「山口土地改良」 14.「山口土地改良 北山」 1.2.その他

第6図 若宮遺跡出土遺物 (1:4)

第3章 若宮1号墳

(1) 立地と現況

分布調査 若宮1号墳は、瀬戸市による詳細分布調査によって確認、登録された古墳である（遺跡番号03872）。なお、すでに愛知県遺跡地図に登録されている山口堰堤北古墳（遺跡番号03286）が若宮1号墳である可能性も指摘されている。

立地 若宮1号墳は、菱野丘陵南東端の南東に向かって傾斜する丘陵斜面に立地する。丘陵頂部の標高は約160mで、古墳は頂部よりやや下った標高約140mの位置に構築されている。

現況 丘陵斜面はマツ等が生育する雑木林で、現在は県有林として管理されている。斜面は植林時に地形改変が加えられ、古墳周囲においても旧状を損なっている部分が多く認められた。調査前は、すでに横穴式石室の天井石が取り除かれ、奥壁と側壁の上半部分が露出している状況であった。また、墳丘の高まりもほとんど認められなかった。

文献

愛知県教育委員会1994『愛知県遺跡地図（I） 尾張地区』
瀬戸市教育委員会1997『瀬戸市内遺跡詳細分布調査報告書』

(2) 調査の経過と方法

調査前 発掘調査に先立ち、平成18年8月に事業区域内の伐採を行い、伐採後、若宮1号墳、塚原1号窯跡が立地する丘陵斜面の地形測量、調査前状況の写真撮影を行った。若宮1号墳の調査を開始するに際しては、すでに露出していた横穴式石室の玄室を中心として主軸方向とそれに直交する方向の基準線を設定した。石室内については、基準線に基づいて玄室内、羨門の前後をそれぞれ4区、都合8区に区分した（第12図）。

墳丘の調査 9月、墳丘周囲と横穴式石室内をすべて人力によって掘削した。石室内に落下した石材については、ほぼ全体を検出した状態を記録した。10月、石室内に落下した石材を除去し、床面までの掘削と精査を行った。大型の石材の取り上げにはチェンブロックを使用した。床面付近の埋土は土壌選別に採取した。11月も床面付近の精査を継続した。精査完了後、古墳と横穴式石室の全景撮影を実施し、撮影と前後して、横穴式石室の図化作業を行った。なお、古墳の全景撮影までに、のべ19日の作業日を要した。

石室の解体 平成19年3月、石室の解体、墳丘の盛土除去を開始、墓壙の検出と掘削、基底石の検出と除去までの作業とそれに伴う記録作業を実施し、現地における調査を完了した。解体作業中の3月25日には能登半島地震が発生し、幾つかの石材が落下したが、作業開始直前だったことが幸いし、人的被害は避けられた。なお、石室の解体と墳丘の盛土除去に、のべ6日の作業日を要した。

現地説明会 この間、12月16日に、現地説明会を実施した。説明会には、近隣の住民を中心に111名が参加した。また、11月29日には当センター運営協議会委員・専門委員の伊藤秋男氏（南山大学名誉教授）、平成19年2月17日には同運営協議会委員の柴垣勇夫氏（静岡大学教授、当時）に現地指導を仰いだ。



写真3 調査前状況



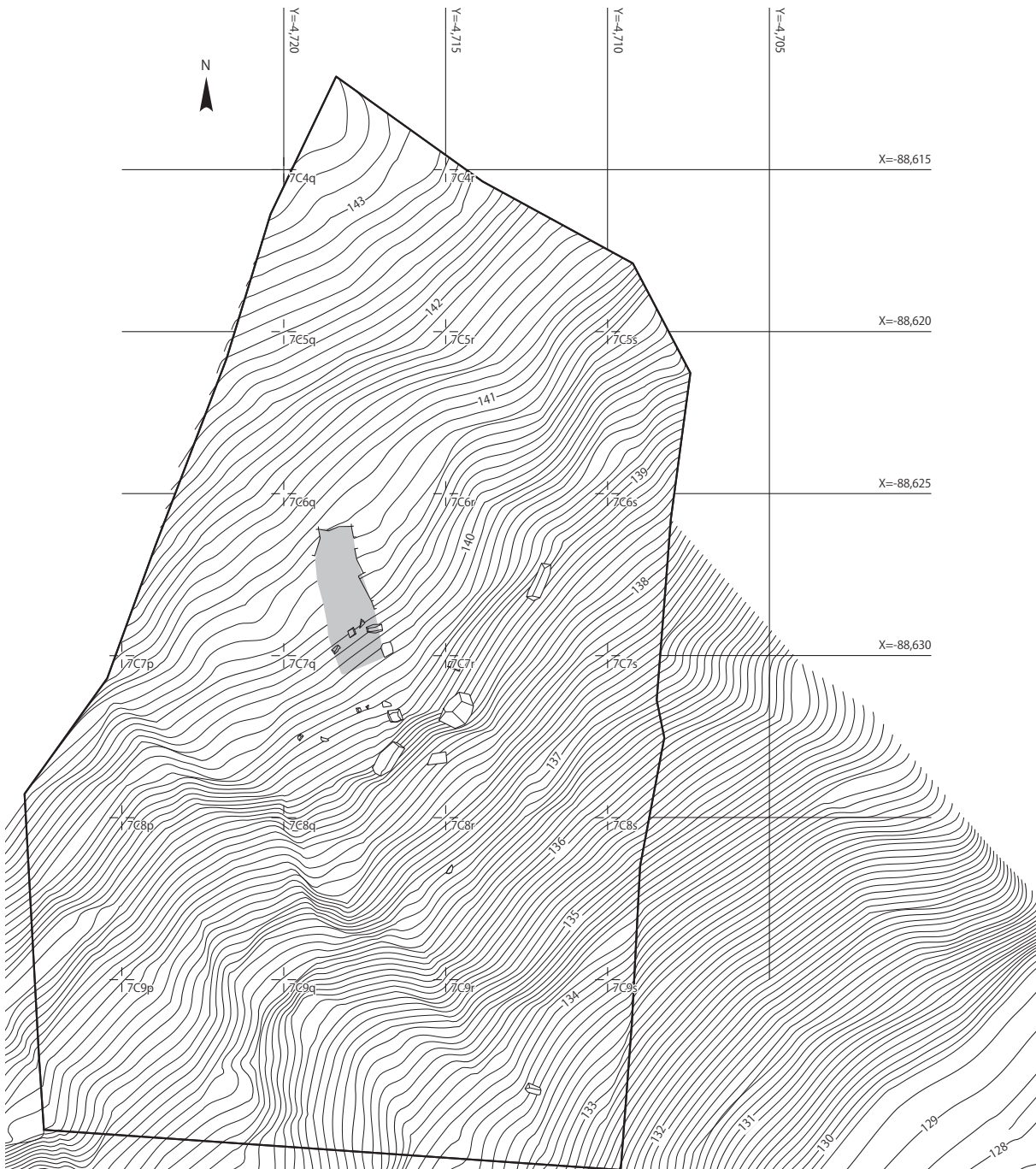
写真4 調査風景



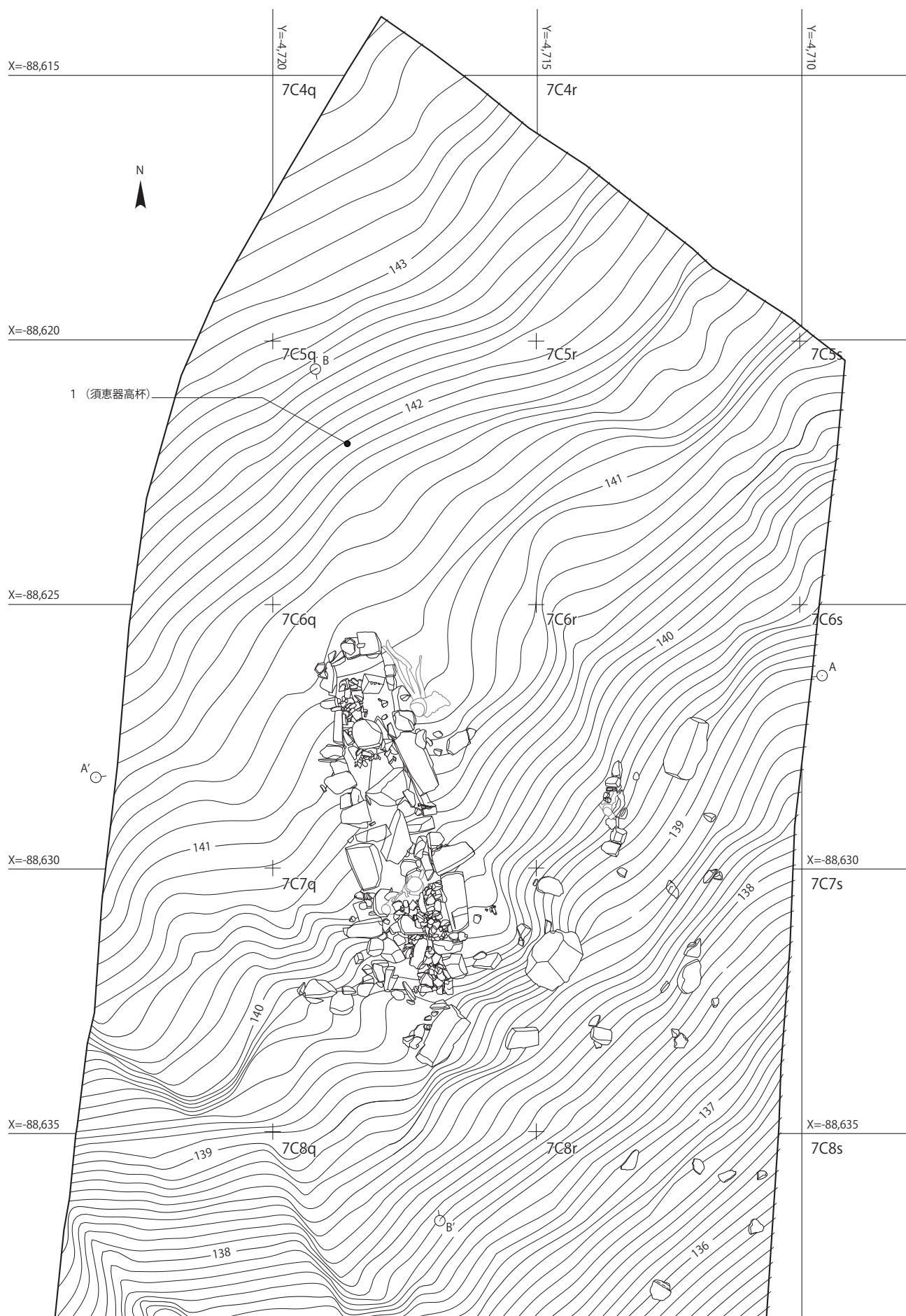
(3) 墳丘と周溝

古墳の規模・形状

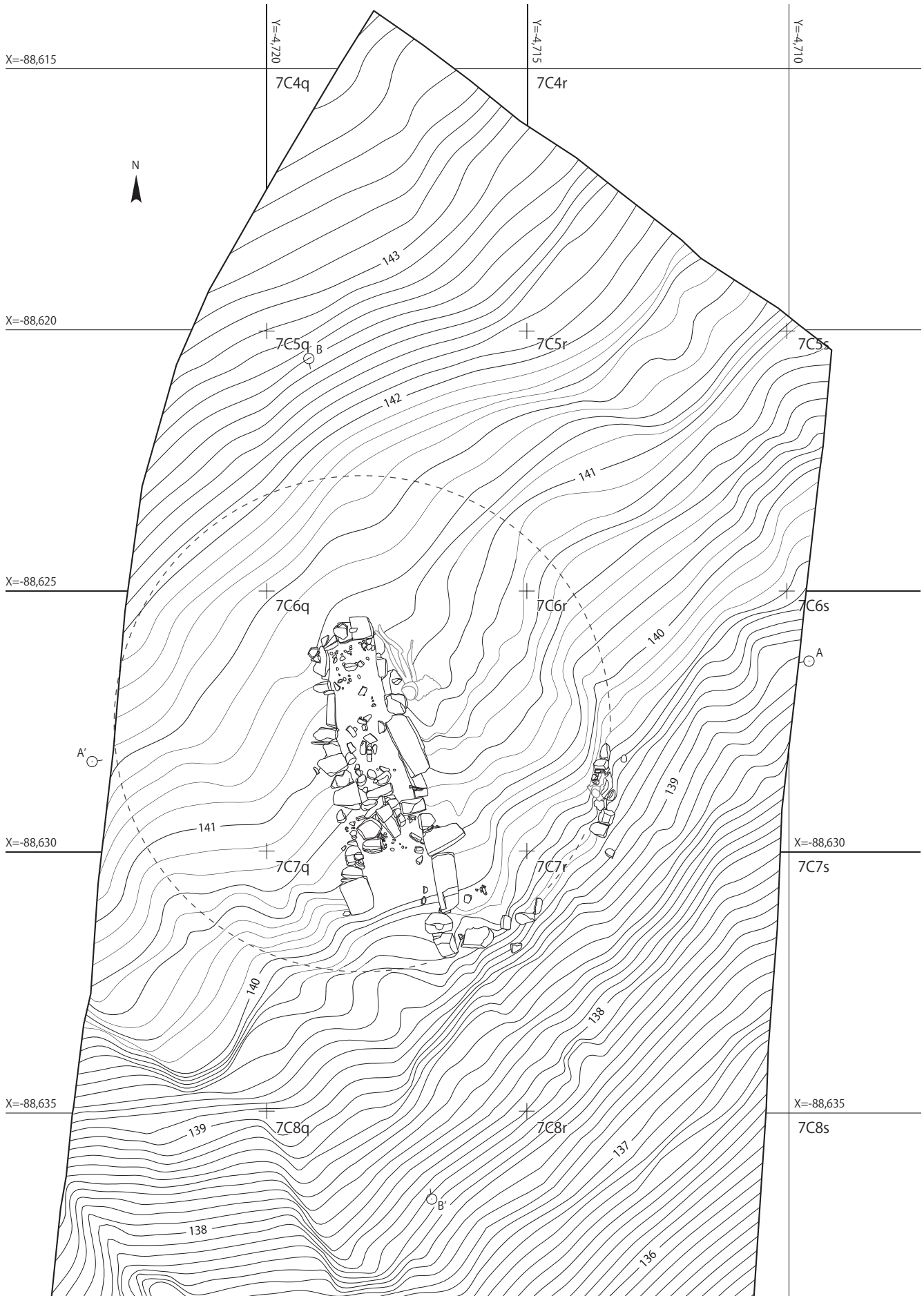
墳丘盛土は多くが流出し、古墳の規模と形状を確定することはできないが、残存する列石などを参考にすると(後述)、古墳は径10m程度の円墳であったと推測される(第9図)。また、墳丘背後の高さが現状で標高約142mであることから、残存する古墳の見かけ上の高さは約2mとなる(第10図)。古墳が斜面上に立地することあって、墳丘盛土の流出は著しく、実際、表土も厚くは堆積していなかった。



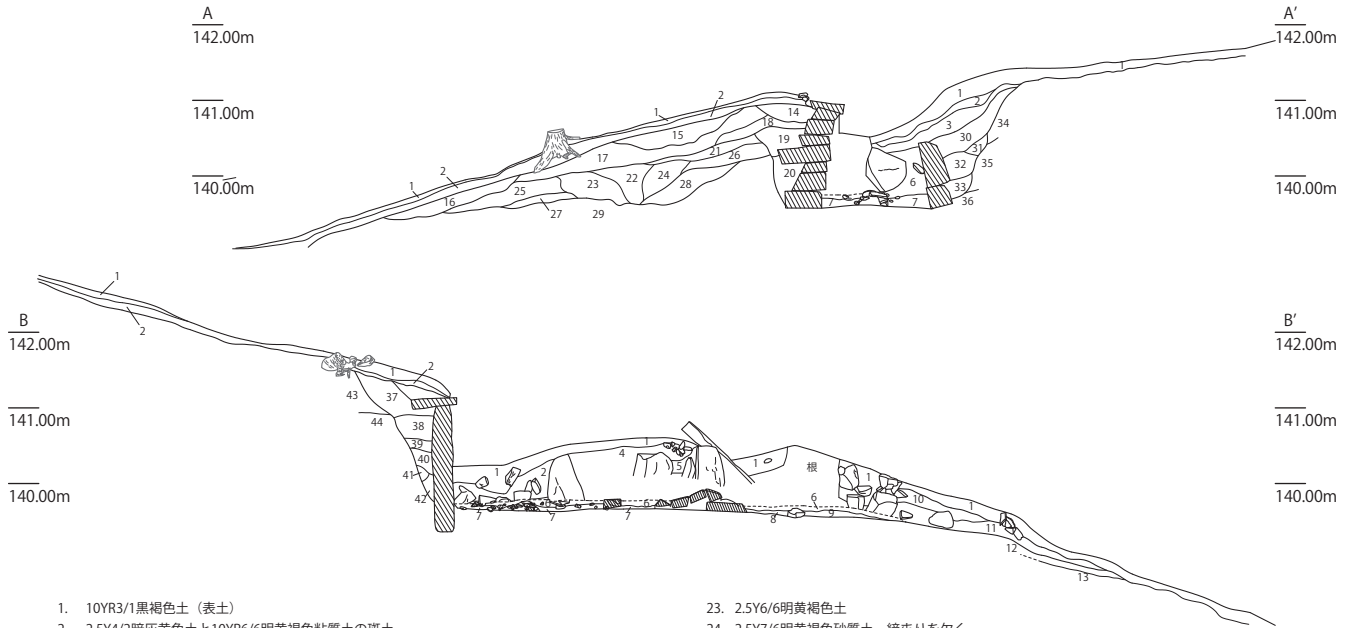
第7図 調査前地形測量図 (1:200)



第8図 横穴式石室検出状況 (1:100)

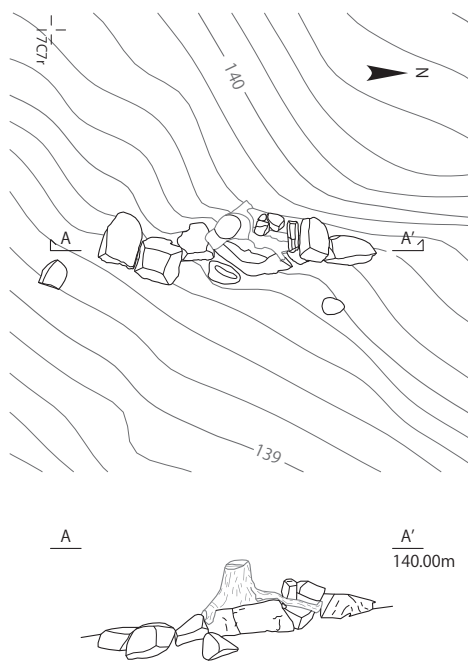


第9図 墳丘平面図 (1:100)



- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 10YR3/1黒褐色土 (表土) 2. 2.5Y4/2暗灰黄色土と10YR6/6明黄褐色粘質土の斑土 3. 10YR6/6明黄褐色粘質土 4. 10YR7/6明黄褐色土 5. 10YR3/1黒褐色土 6. 10YR6/6明黄褐色粘質土、円礫 (礫径 1~3 cm) 混入 7. 10YR7/4にぶい黄褐色粘質土 8. 10YR1/1黒色土 (炭化物層) 9. 10YR5/6黄褐色土、円礫 (礫径 3~5 cm) 混入 10. 10YR6/6明黄褐色土、7.5YR6/6橙色土斑入、円礫 (礫径 3~5 cm) 混入 11. 2.5Y5/4黄褐色土、円礫 (礫径 1~3 cm) 混入 12. 5YR5/8明赤褐色粘質土、円礫 (礫径 3~5 cm) 混入、硬く締まる 13. 2.5Y6/6明黄褐色砂質土 14. 10YR7/6明黄褐色土、円礫 (礫径 3~5 cm) わずかに混入 15. 10YR7/6明黄褐色土、円礫 (礫径 3~5 cm) わずかに混入 16. 10YR7/6明黄褐色土、円礫 (礫径 3~5 cm) わずかに混入 17. 10YR6/6明黄褐色土、円礫 (礫径 3 cm) 混入、やや締まりを欠く 18. 10YR6/8明黄褐色土、締まりを欠く 19. 10YR6/6明黄褐色土と7.5YR6/6橙色土の斑土、円礫 (礫径 3~5 cm) わずかに混入、締まりを欠く 20. 10YR6/8明黄褐色土と7.5YR6/6橙色土の斑土、円礫 (礫径 3~5 cm) 混入 21. 2.5Y7/4浅黄色砂質土、円礫 (礫径 3~5 cm) 混入 22. 2.5Y7/4浅黄色砂質土、円礫 (礫径 3~5 cm) わずかに混入、締まりを欠く | <ol style="list-style-type: none"> 23. 2.5Y6/6明黄褐色土 24. 2.5Y7/6明黄褐色砂質土、締まりを欠く 25. 10YR7/6明黄褐色土、円礫 (礫径 3~5 cm) わずかに混入、やや硬く締まる 26. 5Y7/6明黄褐色土、締まりを欠く 27. 7.5YR6/8褐色土、やや硬く締まる 28. 10YR6/8明黄褐色粘質土 29. 7.5YR6/8褐色粘質土、円礫 (礫径 3~5 cm) 多く混入、硬く締まる 30. 10YR7/8黄褐色土、円礫 (礫径 3~5 cm) 混入、締まりを欠く 31. 10YR6/8明黄褐色土 32. 10YR7/6明黄褐色土、やや粘性を帯びる、円礫 (礫径 5 cm) 混入、締まりを欠く 33. 10YR8/8黄褐色土、やや粘性を帯びる 34. 10YR7/8黄褐色土、円礫 (礫径 3~10cm) 多く混入、硬く締まる (基盤層) 35. 5YR5/6明赤褐色粘質土、円礫 (礫径 3~10cm) 多く混入、硬く締まる (基盤層) 36. 5Y8/1灰白色粘土、均質な堆積 (基盤層) 37. 10YR7/6明黄褐色土、硬く締まる 38. 10YR6/6明黄褐色土、均質な堆積 39. 7.5YR7/6橙色土、均質な堆積 40. 10YR6/6明黄褐色土、やや締まりを欠く 41. 10YR6/6明黄褐色土、円礫 (礫径 3~5 cm) わずかに混入、やや締まりを欠く 42. 10YR5/6黄褐色土、しまりを欠く 43. 10YR7/8黄褐色土、円礫 (礫径 3~10cm) 多く混入、硬く締まる (基盤層) 44. 5YR5/6明赤褐色粘質土、円礫 (礫径 3~10cm) 多く混入、硬く締まる (基盤層) |
|--|---|

第10図 墳丘断面図 (1:100)



第11図 列石平・立面図 (1:50)

墳丘の南東から東斜面の裾にかけては列石が確認された (第11図)。列石に使用された石材は、付近に産出する花崗岩である。列石は南東裾、東裾部分でそれぞれ約1.8mが残存し、羨門立柱石に接続する。列石は残存する盛土上に据えられているが、盛土内に設置されていた可能性も考慮され、残存する列石が外護列石か墳丘内石列のいずれかであったかは確定できない。なお、列石から復原される円弧の径は約9.5mである。

周溝は明確には確認できなかったが、石室背後の周溝に相当すると思われる位置から、須恵器無蓋高杯1点 (第16図1) が出土した。

(4) 埋葬施設

横穴式石室

埋葬施設は古墳の中央に構築された横穴式石室で、南方向 (N-11° 30' -W) に開口する (第13図)。墳丘の中心は横穴式石室の玄室中央に一致する (第9図)。横穴式石室は玄門と羨門を備え、後室を玄室、前室を羨道とする複室系擬似両袖式石室である。前庭と墓道は確認されていない。石室に使用された石材は付近で産出する花崗岩である。石室各部位の計測値は第11図に記載した。なお、側壁の左右 (左壁・右壁) については、奥壁側からの左右とする。

天井石

原位置を保持する天井石は認められず、古墳の周囲に散乱していた長軸1.0m程度の大型の石材 (第7図) が天井石として使用されていた

矢穴

と考えられる。なお、石室内に落下した石材中に矢穴が穿たれ打割された石材があったことから、近世以降、石室の石材を切り出そうとした際に、天井石なども除去されたと推測される。

玄室

玄室 (後室) の平面形は長方形である。ただし、右壁と奥壁が接続する部分は石材が斜めに差し渡されるように積まれている。

奥壁は約1.2mの大型で板状の石材が鏡石として使用されている。奥壁には小口積みされた1石、あるいは2石を介して天井石が架構されていたとみられ、天井までの高さは1.5m程度であったと推測される。

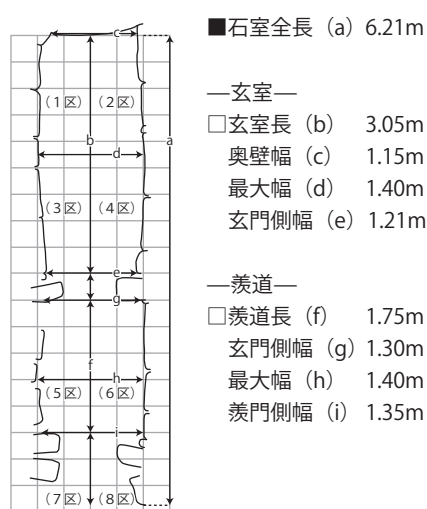
側壁は左壁側で最大8段、約1.4m、右壁側で最大6段、約1.0mが残存する。奥壁側と玄門側には平積みされる石材が目立つが、奥壁側が1段目に積まれるのに対して、それ以外は長手積みされた1段目の石材上に積まれている。平積みされた石材間は各段が水平になるように長手積みされた石材が多い。

右壁側では土圧によって内傾する部分も認められるが、玄室中央付近の左壁側では5段目、約1.0mの高さまでほぼ垂直に石材が積みられ、その上位はわずかに内傾する。側壁の傾斜が変換する高さは斜面側の墓壇の上面の高さ、平積みされた石材の上面の高さにもほぼ対応する。玄門を構成する立柱石は内側に0.2~0.3m突出するようにして樹立される。なお、左壁側と比較して残存状況が良好ではなかった右壁側については、原位置の確定が可能な石材を復元的に図化している部分がある。

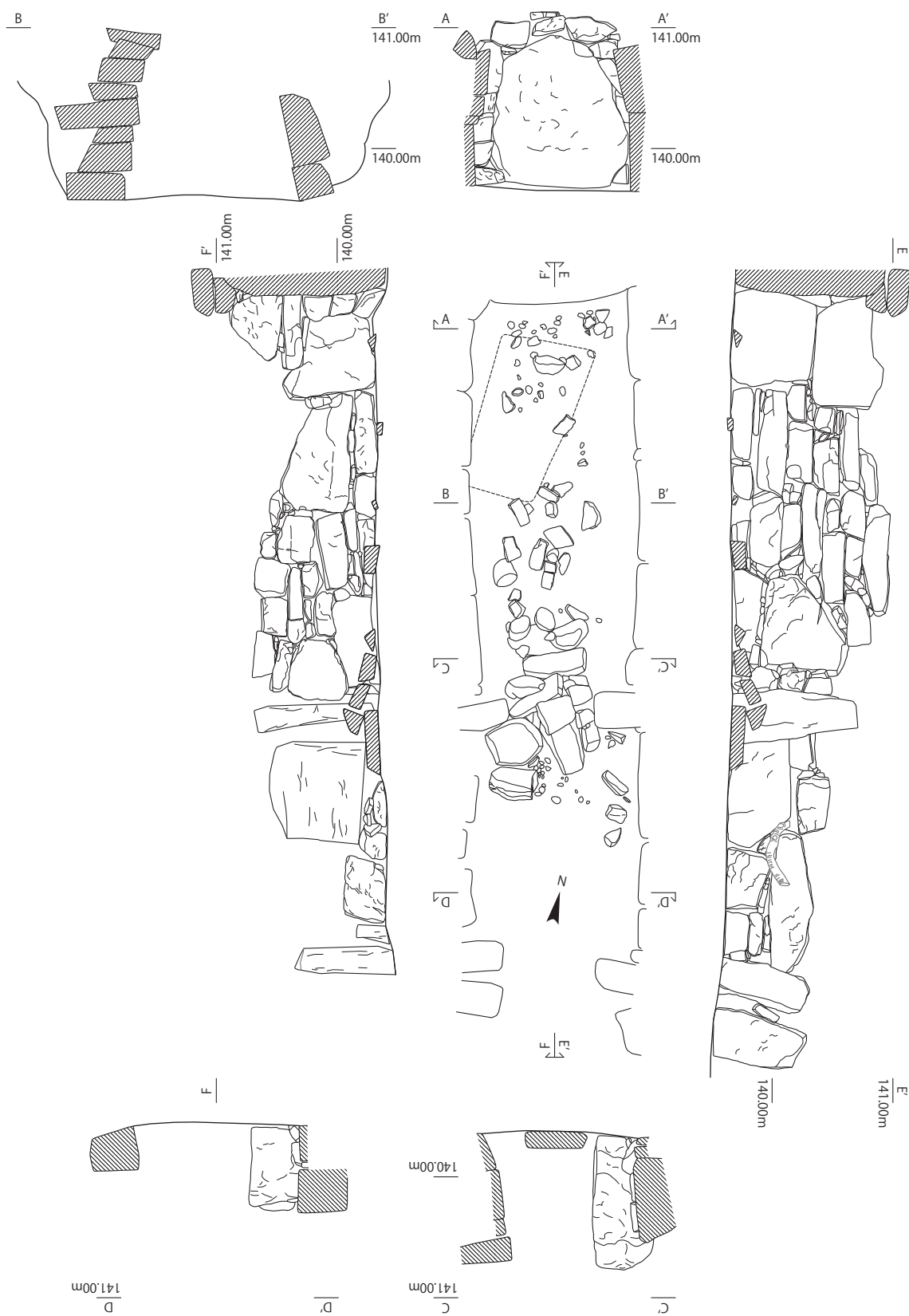
羨道

羨道 (前室) の平面形は玄室と同じく長方形である。玄室幅と羨道幅の比はほぼ1:1で、玄室長と羨道長の比はほぼ3:2である。

側壁は左壁側で2段程度、約0.8m、右壁側で2段程度、約1.0mが残存する。石材の多くは長手積みされるが、玄門側には平積みされた石材も認められる。羨門を構成する立柱石は両側壁で2石が内側に約0.2m突出するように樹立され、左壁側では列石に接続する。



第12図 横穴式石室計測値



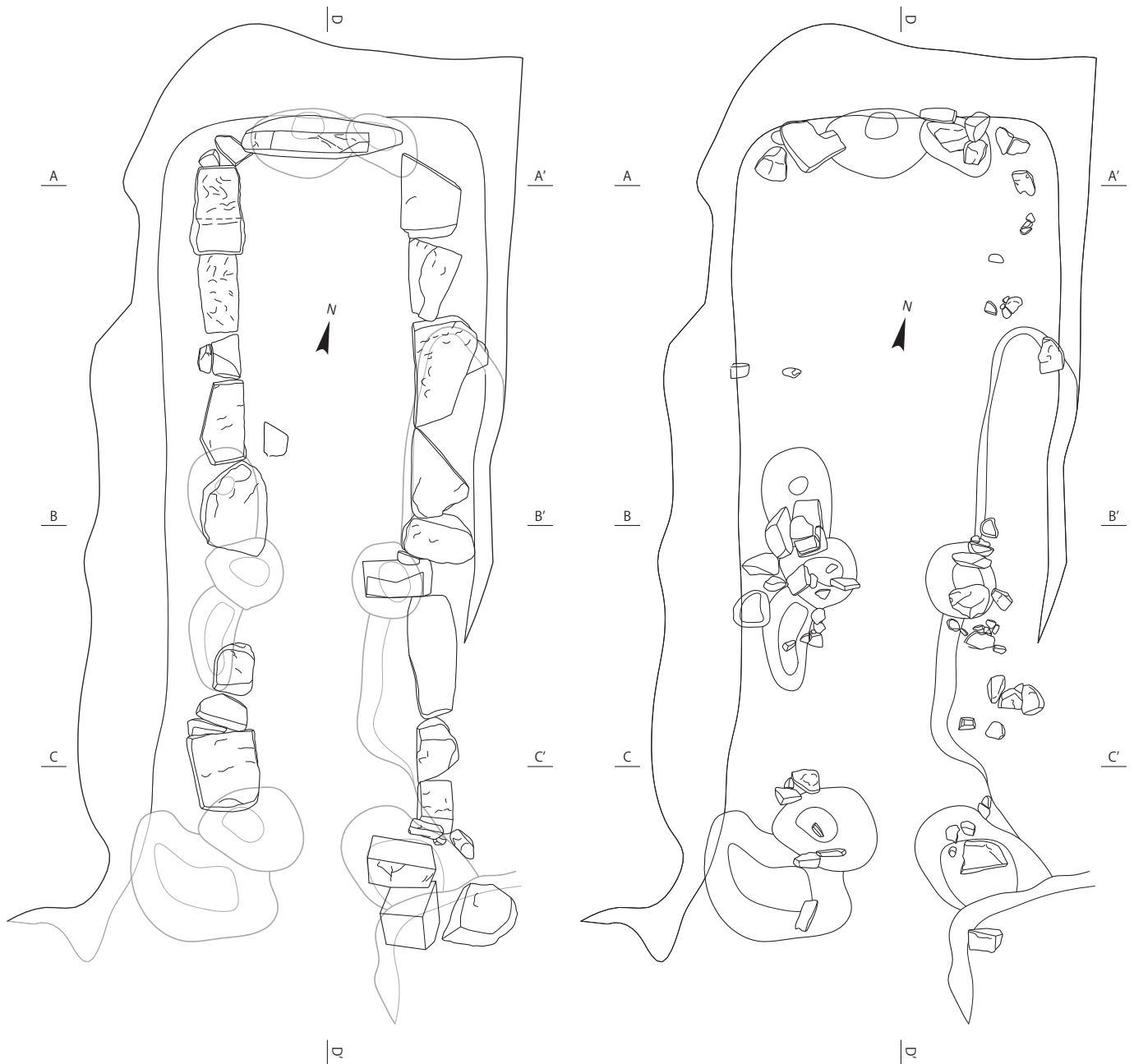
第13図 横穴式石室 (1:50)

床面

玄室床面（墓壙底面）には礫が散在するが、埋土中や基盤層中の礫と敷石を識別することは困難であったため、散在する礫を敷石の残存として判断することは難しい。奥壁側の玄室床面には長さ 1.4m、幅 0.8m の範囲で色調が変化している部分が認められた。木棺痕跡の可能性はある。

閉塞石

また、玄門付近にはやや大型の石材が密集して検出された。これらの石材は墓壙底面となる基盤層上にやや雑然と置かれているが、玄室と羨道を区画する梱石と考えられる。一部の積まれたような石材は、閉塞石の残存ともみられ、玄門において閉塞が行われた可能



第14図 基底石・墓壙 (1:50)



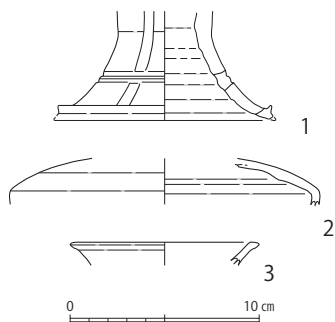
第15図 床面検出・遺物出土状況 (1:50)

性が考えられる。ただ、これら一群の石材の周囲には炭化材、炭化物粒が散在し（第15図）、一部の石材は被熱により赤変し、著しく劣化していた。散布していた炭化材、炭化物粒の年代を測定した結果（第5章（1）を参照）、多くが10世紀以降の年代を示したことから、後世に玄門付近で草木を燃焼する行為が行われ、密集する石材もそれと前後して積まれた可能性もある。

基底石（第14図左）は長手を内側に向けて据え置かれるが、立柱石の前後では、小口を内側に向けたやや小型の石材も認められる。これら小型の石材は立柱石の固定を意図したものであろう。

墓壇（第10・14図右）は丘陵側の右壁側が著しく深く掘削されている一方、斜面側の左壁側は右壁側と比較して浅く、墓壇掘削時の排出土が盛られている。墓壇の平面形は長方形である。墓壇底面には奥壁と立柱石を固定するための土坑が掘削され、土坑周辺には石材を安定して据えるための支い石が認められる。

遺物は床面付近まで山茶碗の出土が認められ、古墳に関連する遺物としては、羨道床面から須恵器長頸壺（第16図2）の小片が破砕されたような状況で出土したのみであった。なお、石室床面付近の埋土を水洗選別したが、須恵器（同3）小片以外の遺物は検出されなかった。



第16図 出土遺物 (1:4)

(5) 出土遺物

出土遺物としては、猿投窯産と推測される須恵器がわずかにある程度である（第16図）。

1は墳丘背後において出土した高杯で、透孔を2段3方向に穿つ。短脚化が著しく、下段の透孔は脚端部付近までを切削する。東山44号窯式から東山50号窯式の前半（東山15号窯式）に相当し、6世紀後葉から7世紀前葉の年代が与えられる。2は羨道床面において出土した長頸壺の体部上半、3は羨道床面付近の埋土の土壌選別によって検出したの口縁部で、いずれも東山50号窯式以降に相当し、7世紀前半以降の年代が与えられる可能性が高いと思われる。

少量の遺物から判断することは難しいが、墳丘から出土した1が古墳の築造時に対応し、羨道から出土した2・3が追葬時に対応すると理解しておきたい。

基底石

墓壇

遺物出土状況

須恵器

古墳の築造時期

追葬

第4章 山口堰堤3号墳範囲確認調査

(1) 立地と現況

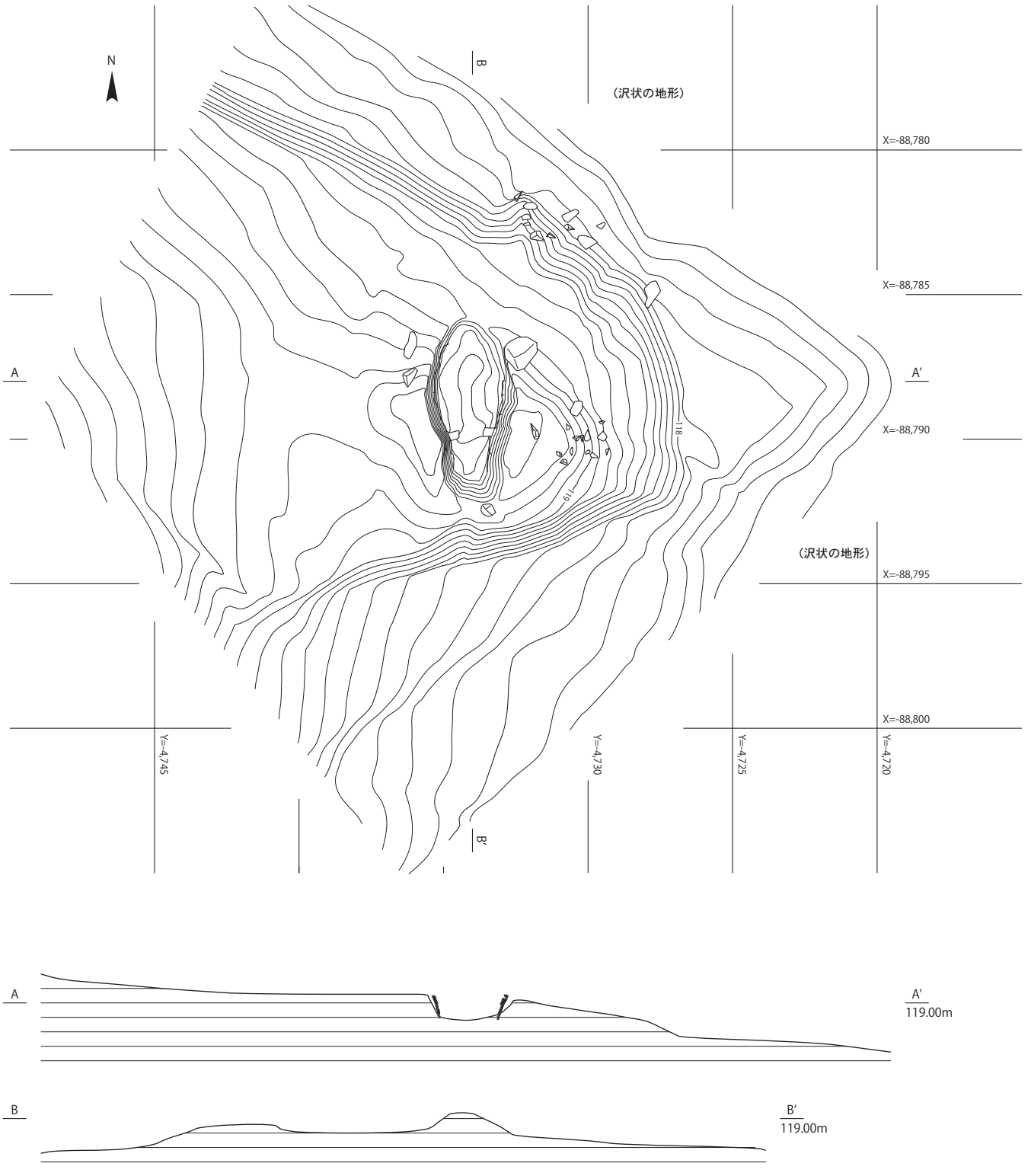
立地	山口堰堤3号墳(遺跡番号03289)は矢田川右岸の丘陵斜面の裾付近に立地する。周囲の標高は約118mである。同1号墳(遺跡番号03287)と2号墳(同03288)は所在不明で、本古墳がそれに当たる可能性があるとされている。周辺の丘陵上には高塚山古墳群、塚原古墳群、若宮1号墳が分布し、本古墳のような立地とは好対照をなす(第3・4図、第1表)。現況は山林で、周囲一面には孟宗竹が繁茂している。
現況	
墳丘	古墳が立地する尾根の裾付近は段状に地形が改変され、古墳そのものも南側や北西側は大きく改変を受けている。すでに横穴式石室が露出していることから、墳丘盛土の大部分は流出していると思われる(第17図)。

文献

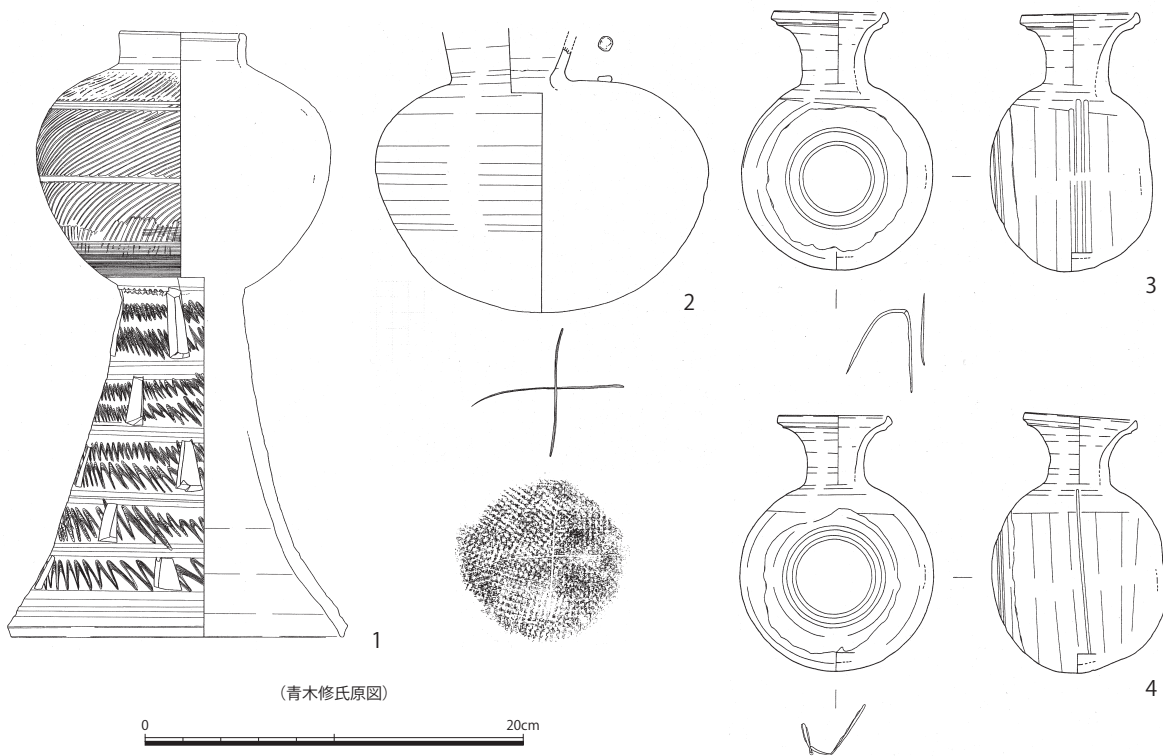
愛知県教育委員会1994『愛知県遺跡地図(1) 尾張地区』
瀬戸市教育委員会1997『瀬戸市内遺跡詳細分布調査報告書』

(2) 既往の調査と出土遺物

発掘調査	山口堰堤3号墳は周辺の土地開発計画に伴い、昭和41年に宮石宗弘氏を中心とする瀬戸教職員考土サークル「瀬戸考土サークル」によって塚原古墳群(1・3・6・7号墳)とともに調査された。
伝山口堰堤出土	現在、瀬戸市が管理、所蔵する遺物中に、山口堰堤北古墳、山口堰堤1号墳出土とされる須恵器がある(第18図、実測図は青木修氏の提供による)。両墳は所在不明で、山口堰堤北古墳は若宮1号墳、山口堰堤1号墳は山口堰堤3号墳と同一の可能性も指摘される(第2章、第3章(1)、第4章(1)を参照)。これらの須恵器が昭和41年の調査時に山口堰堤3号墳から出土した可能性もあるが、出土の経緯に確たる情報はない。ただ、若宮1号墳の調査状況(第3章を参照)からは、これらの須恵器が若宮1号墳から出土したとは考えにくい。なお、山口堰堤3号墳から鉄製品(大刀、鉄鎌)が出土したとの情報もあるが、遺物の詳細は不明である。
脚付短頸壺	1の脚付短頸壺は山口堰堤北古墳出土とされるが、「塩草横穴古墳出土 塩草町 加藤十九六氏寄贈」との注記がある。脚部には透孔を5段5方に配し、波状文を施す。6世紀後半に帰属すると考えられる。2も山口堰堤北古墳出土とされる大型平瓶で、体部上半に円形浮文を貼付する。体部下半には格子叩きが残る。体部の丸みが顕著であることなどから、1と同様、6世紀後半に帰属すると考えられる。3(4)は山口堰堤1号墳出土とされる小型の提瓶(フラスコ形長頸瓶)で、3には「1960.9 堰堤一号墳」の注記がある。体部は球体に近い。頸部が短く、沈線を欠く特徴などから、東山50号窯式期、7世紀前半から中葉に帰属すると考えられる。なお、胎土の観察から、1・2は猿投窯産、3(4)は湖西窯産と推測される。
大型平瓶	
提瓶	



第17図 墳丘測量図 (1:200)



第18図 伝山口堰堤北古墳・山口堰堤1号墳出土遺物 (1:4)

(3) 範囲確認調査の経過と方法

調査の経過

範囲確認調査は平成18年8月に実施した。なお、範囲確認調査には、のべ4日の作業日を要した。

調査に先立ち、調査前状況の写真撮影と、墳丘と墳丘周囲の地形測量を行った(第17図)。範囲確認調査は古墳(石室)の主軸方向とそれに直交する方向の墳丘斜面とその周囲の4地点(T.T.01~04)、墳丘南東斜面の1地点(T.T.05)、計5地点に試掘坑を設定して実施した。各試掘坑では人力により表土等を掘削し、墳丘の築成状況と遺存状況、外部施設の有無等を観察した。調査後、人力による埋め戻しを行い、範囲確認調査を完了した。

横穴式石室の測量

範囲確認調査の結果、古墳は工事計画の変更によって現地保存されることが決定し、平成22年9月、調査報告書の作成に合わせて横穴式石室の清掃と測量調査を実施した。なお、石室の清掃と測量調査には、のべ3日の作業日を要した。



写真5 調査前状況



写真6 調査風景

(4) 範囲確認調査の結果

試掘坑の配置は第19図、各試掘坑の平面・土層断面図は第20図に示した。なお、今回の範囲確認調査においては、古墳が現地保存される可能性も考慮して、いずれの試掘坑においても墳丘の断ち割り調査は行わなかった。

調査の概要

以下、各試掘坑における調査所見を記述する。

T.T.01は主軸上の南側斜面から沢状の地形付近にかけて設定した。

T.T.01

腐植土を除去すると、墳丘側の斜面で石室内に流入したと思われる黄褐色土と黒褐色土の斑土、斜面の裾付近で基盤層である明黄褐色土が露呈した。墳丘盛土、葺石や周溝等の外部施設は確認されなかった。検出した墳丘側の斜面が急峻であったこと、また、現状でも墳丘南側斜面が直線的であることから、墳丘の南側は近年、段状に地形が大きく改変されたと考えられる。基盤層は沢状の地形まで緩やかに下降するのみで、沢状の地形付近では、表土下位において滞水環境下にあったと思われる灰色砂質土の堆積を確認した。近世以降の陶磁器以外の遺物は出土しなかった。

T.T.02は主軸に直交する方向で西側の尾根の斜面から墳丘にかけて設定した。

T.T.02

腐植土を除去すると、基盤層である明黄褐色土が露呈し、墳丘盛土、葺石や周溝等の外部施設等は確認されなかった。基盤層は西の尾根から墳丘に向かって緩やかに傾斜するのみで、墳丘築成時に地形を大きく改変した状況は確認されなかった。ただ、現状において地形がわずかに低い部分が観察されることから、尾根側に周溝が掘削されていたとも考えられる。近世以降の陶磁器以外の遺物は出土しなかった。

T.T.03は主軸上の北側斜面から沢状の地形付近にかけて設定した。

T.T.03

腐植土を除去すると、基盤層である明黄褐色土が露呈し、墳丘盛土、葺石や周溝等の外部施設等は確認されなかった。墳丘側の斜面には石材が散乱するが、いずれも後世に移動したものと思われる。近世以降の陶磁器以外の遺物は出土しなかった。

主軸に直交する方向の東側斜面にT.T.04、見かけ上、東側斜面が張り出す地点に任意でT.T.05を設定した。腐植土を除去すると、基盤層である黄褐色土が露呈し、墳丘盛土、葺石や周溝などの外部施設等は確認されなかった。

T.T.04・T.T.05

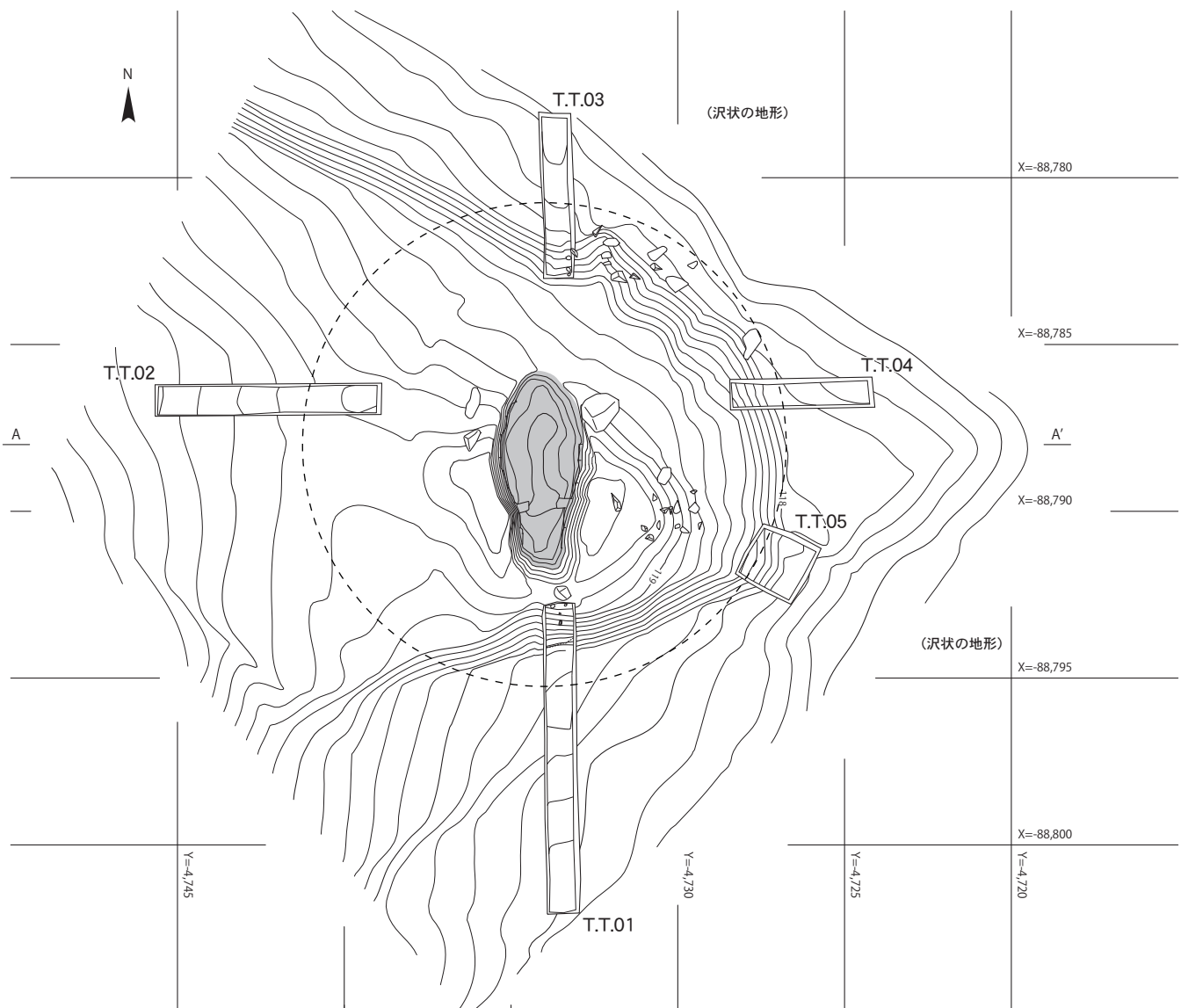
T.T.04では近世以降の陶磁器以外の遺物は出土しなかったが、T.T.05の墳丘側斜面下位の緩傾斜面から猿投窠産と推測される須恵器蓋杯蓋1点(第21図1)が出土した。須

出土遺物

恵器蓋杯は口径 14cm 程度と推測され、天井部分の約二分の一程度まで回転ヘラケズリが及ぶ。型式としては、東山 61 号窯式から東山 44 号窯式に相当し、およそ 6 世紀後葉の年代が与えられる。

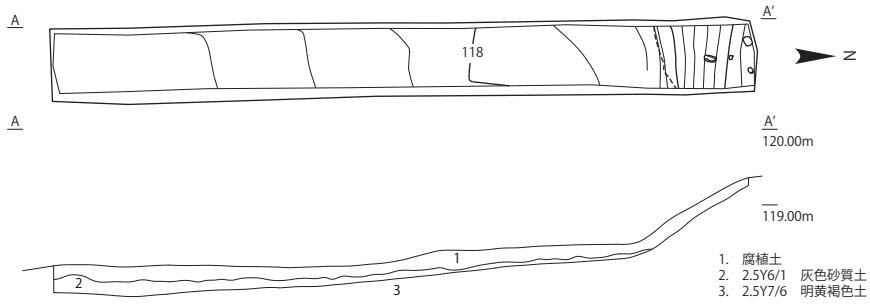
小結

範囲確認調査の結果、墳丘盛土や周溝など古墳の築成に関する情報は得られず、古墳の規模を確定することはできなかった。ただ、墳丘北東側や西側は旧状を比較的良好に残している可能性が考えられ、それを参考にすると、古墳は径 14～15m の円墳として復原される（第 19 図）。また、墳丘周囲から出土した須恵器により、古墳は東山 61 号窯式期から東山 44 号窯式期、6 世紀後葉に築造されたと推測される。この年代は埋葬施設である横穴式石室の構造から推測される年代とも矛盾しない。

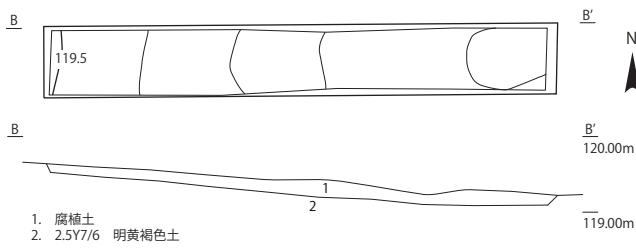


第19図 試掘坑配置・墳丘復原図 (1:200)

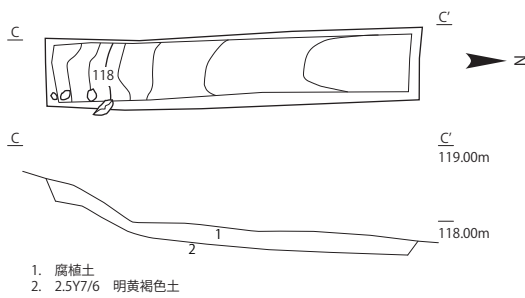
T.T.01



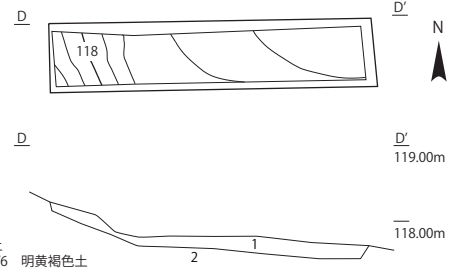
T.T.02



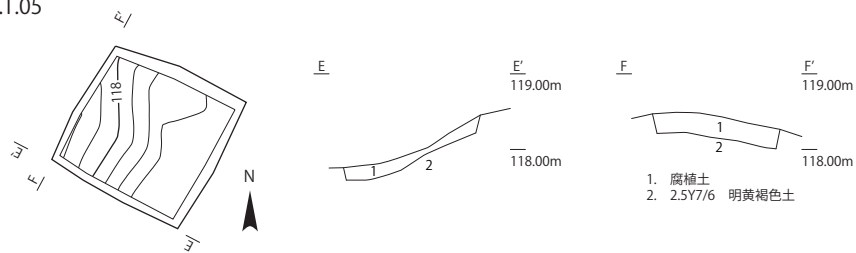
T.T.03



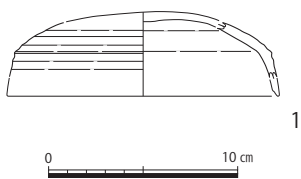
T.T.04



T.T.05



第20図 試掘坑平面・土層断面図 (1:100)



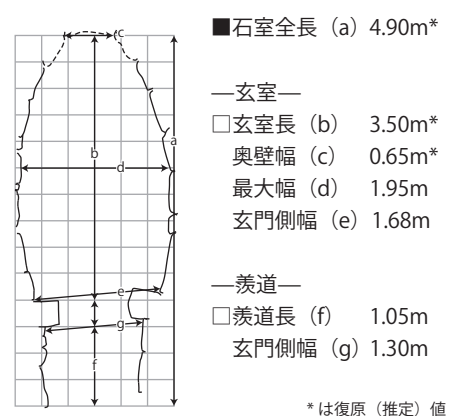
第21図 T.T.05出土遺物 (1:4)

(5) 埋葬施設

横穴式石室

埋葬施設は古墳の中央に構築された横穴式石室で、石室は下部のみが残存し、すでに露出した状態となっている。石室内に崩壊した石材は見受けられず、石室は比較的安定した状態を維持している。

横穴式石室はほぼ真南方向 (N-1°-W) に開口する (第23図)。石室は玄門を備える擬似両袖式石室である。現状では羨道の途中までが露出する状態で、前庭と墓道は確認できない。石室に使用された石材は付近で産出する花崗岩である。石室各部位の計測値は第22図に記載した。なお、側壁の左右 (左壁・右壁) については、奥壁側からの左右とする。



第22図 横穴式石室計測値

天井石・奥壁

天井石と奥壁はすでに原位置になく、周囲に散乱する長軸 1.0m 程度の大型の石材 (第17図) が天井石または奥壁として使用されていたと考えられる。

玄室

玄室の平面形は両側辺が大きく張り出す胴張り状を呈し、玄室中央付近が最大幅を計測する。奥壁付近の側壁はすでに失われているが、石材が落下して窪んだ状態が観察されることから、奥壁付近が著しく窄まる形状をしていたと確認される。奥壁は石材が抜き取られた痕跡から、幅 0.6m 程度であったと推測される。この場合、奥壁幅と玄室最大幅の比はほぼ 1 : 3 となる。

側壁は左壁側で最大 4 段、高さ約 0.8m、右壁側で最大 5 段、高さ約 0.9m が残存する。1 段目から 2 段目は長手積みされる石材が多く、水平方向の目地が比較的良好に通っている。3 段目より上位には平積みされるやや大型の石材も散見され、若宮 1 号墳の壁面構成とも類似する (第 3 章 (4) を参照)。石材は垂直、あるいはやや外傾するように積み、石室下部の横断面は舟底状を呈する。玄門を構成する立柱石は、玄室側で 0.3m、羨道側で 0.2m 内側に突出するようにして樹立される。なお、基底石付近と床面の状況は一面を覆う孟宗竹の根により確認が困難であった。

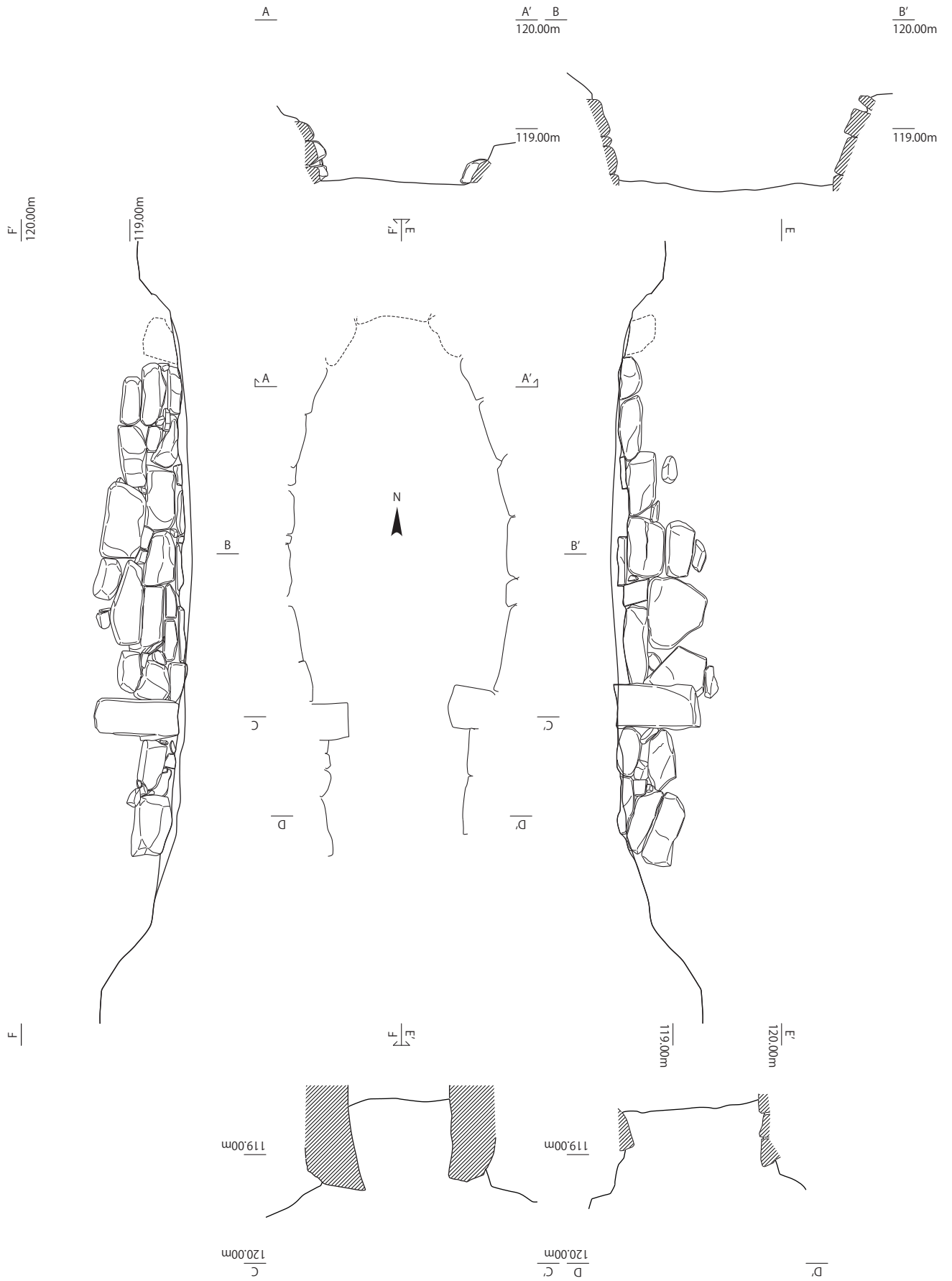
羨道

羨道は玄室側がやや幅広の形状を呈する。羨道が確認できる部分は少ないが、玄室と羨道が一連の胴張り状の平面形を呈していた可能性が高いと思われる。側壁は左壁側で 3 段程度、約 0.6m、右壁側で 2 段程度、約 0.4m が残存する。石材は玄室と同様に長手積みされるものが多い。

閉塞

石室の開口部付近は約 0.8m の高さまでが埋没し、羨道途中から上り傾斜となる。石材の露出は認められないが、閉塞石が埋没している可能性がある。

なお、石室内から遺物は採集されなかった。



第23図 横穴式石室測量図 (1:50)

第5章 分析・考察

(1) 若宮1号墳の放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ

伊藤茂・尾寄大真・丹生越子・廣田正史・小林紘一

Zaur Lomtatidze・Ineza Jorjoliani

愛知県瀬戸市に位置する若宮1号墳より検出された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

試料と方法

測定試料の情報、調製データは第2表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

結果

第3表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ:INTCAL09)を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

文献

Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.

Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.

中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の¹⁴C年代, 3-20.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg,

A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 050,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.

第2表 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-13924	位置:5区(No.6) 層位:2層 その他:2006.11.1	試料の種類:炭化材(マツ属複維管束亜属) 試料の性状:最外以外樹皮に近い部分を採取 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-13925	位置:4区(No.7) 層位:2層 その他:2006.11.1	試料の種類:炭化材(マツ属複維管束亜属) 試料の性状:最外以外樹皮に近い部分を採取 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.2N)
PLD-13926	位置:1区(No.9) 層位:2層 その他:2006.11.1	試料の種類:炭化材(マツ属複維管束亜属) 試料の性状:最外年輪 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.3N)
PLD-13927	位置:6区 層位:床面付近 その他:2006.10.25	試料の種類:炭化材(マツ属複維管束亜属) 試料の性状:最外年輪 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.4N)
PLD-13928	位置:4区(No.14) 層位:床面直上 その他:2007.3.2	試料の種類:炭化材(針葉樹) 試料の性状:不明 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.5N)
PLD-13929	位置:4区(No.15) 層位:床面直上 その他:2007.3.2	試料の種類:炭化材(マツ属複維管束亜属) 試料の性状:最外以外樹皮に近い部分を採取 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.6N)
PLD-13930	位置:4区(No.16) 層位:床面直上 その他:2007.3.2	試料の種類:炭化材(マツ属複維管束亜属) 試料の性状:最外年輪 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.7N)
PLD-13931	位置:2区 層位:床面付近 その他:2006.11.1	試料の種類:炭化材(マツ属複維管束亜属) 試料の性状:最外年輪 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N,塩酸:1.8N)

第3表 放射性炭素年代測定と暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-13924 遺物No.No.6	-28.91 \pm 0.28	1181 \pm 23	1180 \pm 25	782AD(5.9%)789AD 810AD(32.3%)848AD 853AD(30.0%)887AD	776AD(92.8%)895AD 925AD(2.6%)937AD
PLD-13925 遺物No.No.7	-29.62 \pm 0.34	1120 \pm 23	1120 \pm 25	894AD(9.1%)903AD 915AD(59.1%)969AD	885AD(95.4%)986AD
PLD-13926 遺物No.No.9	-27.41 \pm 0.16	588 \pm 20	590 \pm 20	1319AD(53.0%)1352AD 1390AD(15.2%)1400AD	1305AD(69.2%)1365AD 1384AD(26.2%)1410AD
PLD-13927	-29.47 \pm 0.18	1234 \pm 19	1235 \pm 20	712AD(30.5%)746AD 767AD(15.0%)783AD 789AD(17.5%)812AD 845AD(5.2%)856AD	690AD(38.2%)750AD 762AD(57.2%)873AD
PLD-13928 遺物No.No.14	-26.61 \pm 0.17	1030 \pm 20	1030 \pm 20	994AD(68.2%)1020AD	983AD(95.4%)1027AD
PLD-13929 遺物No.No.15	-27.89 \pm 0.26	1022 \pm 22	1020 \pm 20	995AD(68.2%)1023AD	982AD(95.4%)1033AD
PLD-13930 遺物No.No.16	-29.02 \pm 0.22	1028 \pm 24	1030 \pm 25	994AD(68.2%)1021AD	974AD(95.4%)1033AD
PLD-13931	-25.33 \pm 0.16	433 \pm 20	435 \pm 20	1437AD(68.2%)1456AD	1429AD(95.4%)1475AD

(2) 若宮1号墳出土炭化材の樹種同定

黒沼保子 (パレオ・ラボ)

若宮1号墳から出土した炭化材8点の樹種同定を行った。なお、同じ炭化材を用いてAMS法による年代測定を行っている(第5章(1))を参照。

試料と方法

試料は1区2層(No.3)、2区床面付近(No.8)、4区2層(No.2)、および床面直上(No.5~7)、5区2層(No.1)、6区床面付近(No.4)から出土した炭化材計8点である。手割りあるいはカッターナイフを用いて3断面(横断面・接線断面・放射断面)を作製、直径1cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定し、銀ペーストを塗布して乾燥させた後、金蒸着して走査電子顕微鏡(日本電子株製 JSM-5900LV型)を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

結果

樹種同定の結果、マツ属複維管束亜属と針葉樹の2分類群が確認された。8試料中の7試料がマツ属複維管束亜属であり、残り1試料は針葉樹までの同定しか行えなかった。結果の一覧は第4表に示す。

以下に同定された分類群の木材組織の特徴を記載し、電子顕微鏡写真は写真7に示す。

(1) マツ属複維管束亜属 *Pinus* Subgen. *Diploxylo* マツ科 写真 1a-1c(No.2)・2a-2c(No.6)

仮道管、垂直・水平樹脂道、放射柔組織、放射仮道管からなる針葉樹である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部は広い。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側へ向かって鋸歯状の突起がみられる。マツ属複維管束亜属は暖帯から温帯下部に分布する常緑高木で、アカマツとクロマツがある。

(2) 針葉樹 *Coniferous wood* 写真 3a-3c(No.5)

仮道管、放射柔組織からなる針葉樹である。材の状態が悪く、樹脂細胞の有無および分野壁孔の型が確認できなかったため、針葉樹までの同定とした。

試料No.5は針葉樹までの同定しか行えなかったが、それ以外はすべてマツ属複維管束亜属であった。マツ属複維管束亜属のクロマツは沿岸部、アカマツは内陸に分布する傾向がある。陽樹で乾燥によく耐えるため二次林として伐採後の森林によく生育するほか、荒れた土地でも優占種となる。

まとめ

アカマツとクロマツの材はきわめてよく似ており、心材の保存性は中庸、油気が多く靱性は大である。建築、器具、土木、器具など多用途に利用され、また燃焼性がよいため燃料材にもよく用いられる。当試料の形状はすべて細かい破片状であり、燃料材の可能性も考えられる。

第4表 樹種同定結果一覧

試料No.	区	層位	No.	樹種
1	5区	2層	No.6	マツ属複維管束亜属
2	4区	2層	No.7	マツ属複維管束亜属
3	1区	2層	No.9	マツ属複維管束亜属
4	6区	床面付近		マツ属複維管束亜属
5	4区	床面直上	No.14	針葉樹
6	4区	床面直上	No.15	マツ属複維管束亜属
7	4区	床面直上	No.16	マツ属複維管束亜属
8	2区	床面付近		マツ属複維管束亜属

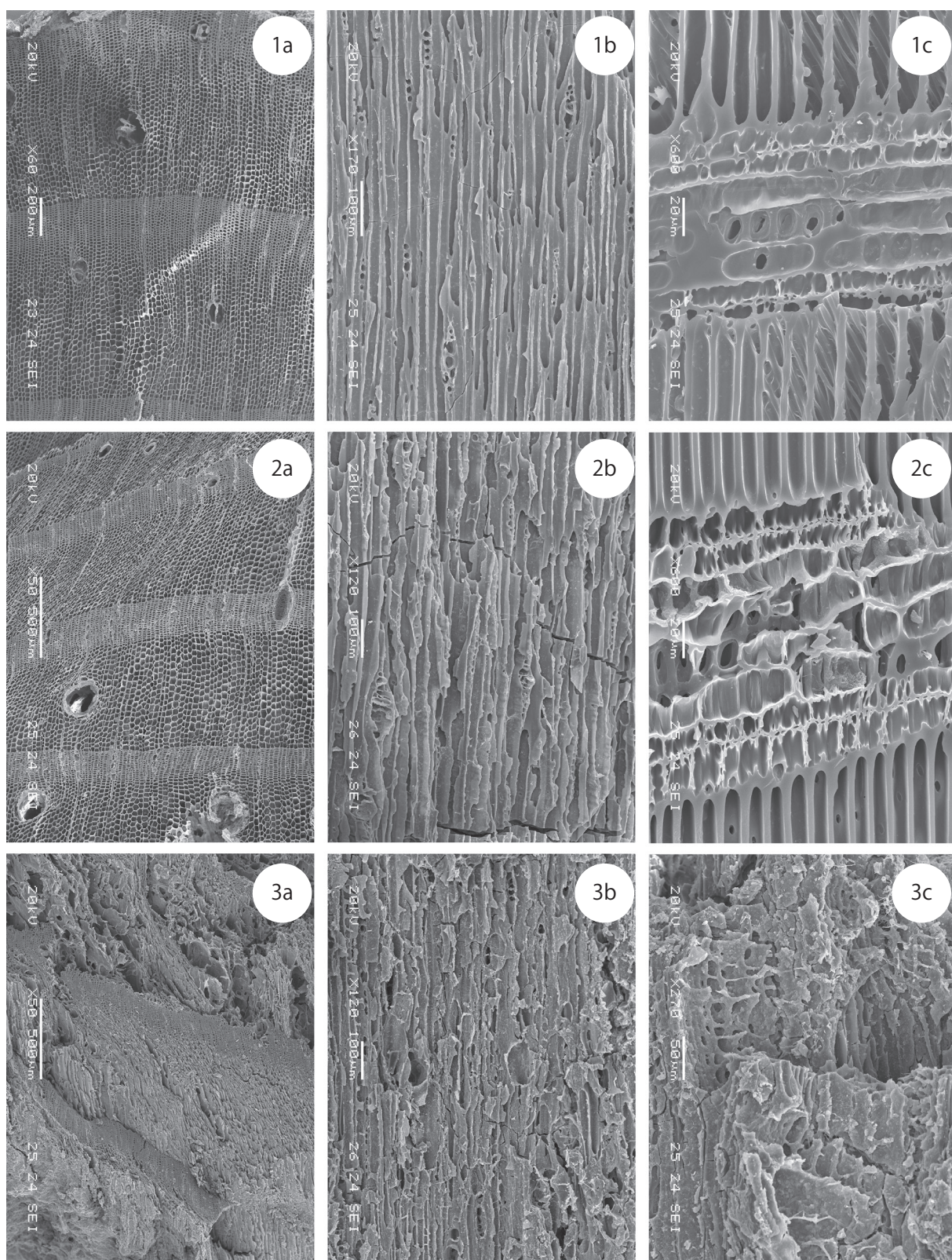


写真7 出土材の顕微鏡写真 (a: 横断面、b: 破断面、c: 放射断面)

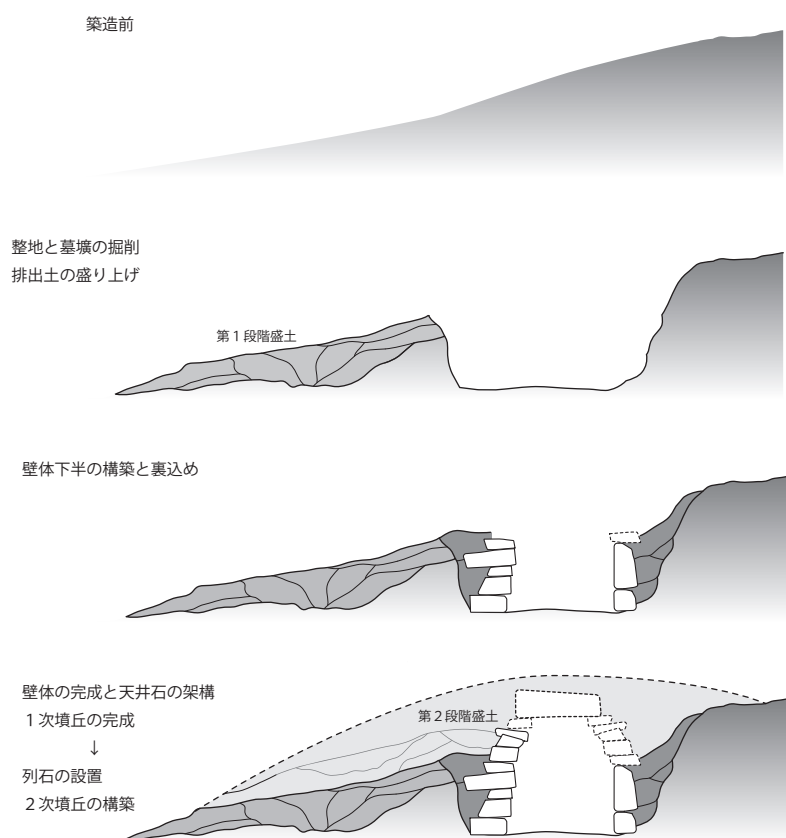
1a-1c. マツ属複維管束亜属 (No.2)

2a-2c. マツ属複維管束亜属 (No.2)

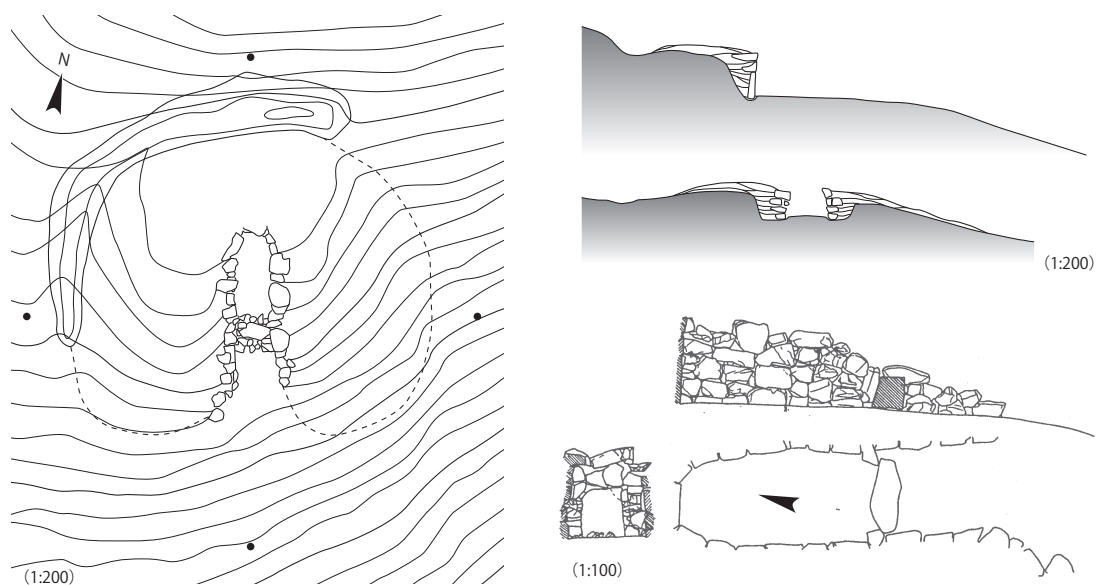
3a-3c. 針葉樹 (No.5)

(3) 若宮1号墳の石室と墳丘の構築過程

- 立地と古墳の構築 若宮1号墳は南東方向に傾斜する斜面に立地し、この立地条件が古墳の構築過程にも大いに関係している。発掘調査では2次墳丘を認めることができなかったため、以下に1次墳丘の完成に至るまでの石室と墳丘の構築過程について段階を追って整理する(第24図)。
- 整地、墓壇の掘削 【工程1】整地と墓壇の掘削、排出土の盛り上げ
墳丘下において旧表土は確認されなかった。このことから、古墳の築造に際しては傾斜地であった旧地形を整地する作業が行われたと考えられる。整地と前後して墓壇が掘削される。墓壇掘削時の排出土は斜面側に盛り上げられ(1次墳丘の第1段階盛土)、石室を構築するための墓壇が完成する。
- 壁体下半の構築 【工程2】壁体下半の構築と裏込め
墓壇内には壁体を構成する石材が積まれ、併行して壁体と墓壇壁面との隙間には裏込め土が充填される。壁体の下半は斜面側の墓壇の上面(1次墳丘の第1段階盛土の上面)までほぼ垂直に積まれ、壁体下半が完成する。
- 1次墳丘の完成 【工程3】壁体の完成と天井石の架構、1次墳丘の完成
斜面側の墓壇の上面(1次墳丘の第1段階盛土の上面)より上位は壁体が内傾するように石材が積まれる。それと併行して、壁体上半の石材の裏込めを兼ねた盛土(1次墳丘の第2段階盛土)が積み重ねられる。壁体の完成後、天井石が架構され、さらにそれを覆うようにして盛土が積まれ、1次墳丘が完成する。
【工程4】墳丘と外部施設の整備
1次墳丘の完成後、列石の設置、2次墳丘の盛土が行われ、石室と墳丘の一連の構築が終了する。
- 墓壇の特徴 上記の整理から、石室と墳丘の構築過程は密接に関連したものであることが理解される。また、墓壇の構築方法は筧瀬明宏による墓壇類型(筧瀬1996)の「b2類」、「横穴系の構築墓壇で、墓壇掘削時の排出土を一部に盛り上げる工法」に相当する。この工法は古墳を傾斜地に構築する際の墳丘崩壊を避けるための工法で、横穴式石室の壁体下半までを設置するための深い墓壇の掘削は、壁体の裏込め等にかかる築造労力を軽減する意図が大きく反映された結果であろう。若宮1号墳においては、南東方向に傾斜する斜面に横穴式石室を構築するに際して、石室の開口方向を南に設定しようとした意図にも左右されて、このような工法が採用されたとも推測される。
- 穴田11号墳 若宮1号墳と同様、南東方向に傾斜する斜面に立地し、深い墓壇を掘削する古墳として、水野川流域の穴田11号墳がある(第25図)。また、石室の開口方向が南東方向に偏する特徴も共通する。穴田11号墳は若宮1号墳に後出する7世紀後半の築造であるが(第5章(4)を参照)、異なる流域にあって、地形の利用、築造労力の軽減、開口方向に対する同様の意識が反映されていることは興味深い。



第24図 若宮1号墳の構築過程



第25図 穴田11号墳の墳丘と横穴式石室

文献

瀬戸市教育委員会1991『穴田第11号墳・種成第4号窯跡』

笠瀬明宏1996「古墳墓壇構築過程の歴史的意義—筑前地域を中心に—」『福岡大学大学院論集』第28巻
第2号 福岡大学大学院論集刊行委員会

(4) 若宮1号墳と山口堰堤3号墳の横穴式石室の系譜

- 若宮1号墳 若宮1号墳の横穴式石室は複室系擬似両袖式石室、つまり、複室構造の石室における単室的な利用が認められる点に大きな特徴がある。奥壁に鏡石を据えることも含めて、同様の構造は矢作川流域において独自に発達した擬似両袖式石室に系譜が求められる。
- 擬似両袖式石室 矢作川流域における擬似両袖式石室の展開過程についてはすでに詳細に整理されている(土生田1988、森2001など)。それを参考にすると、玄門立柱石を採用した擬似両袖式石室の初現は東山61号窯式期、6世紀中葉の不動2号墳を典型とする。不動2号墳は玄門に段構造を有し、玄室平面形はわずかに胴張り状を呈する。その後、東山44号窯式期、6世紀後葉にかけて、擬似両袖式石室は構造的に発展し、石室が大型化、複室化する。同時に段構造の解消、奥壁の1石化、石材の大型化が認められる。神明宮1号墳、岩津1号墳、藤山1号墳、池田1号墳がその典型例である。これら複室構造の擬似両袖式石室を簡略化した複室系擬似両袖式石室の例が塚原1号墳である。なお、この系列上にある横穴式石室の開口方向は西方向が多い。
- 塚原1号墳
- 窪地古墳 ほぼ同時期、複室系擬似両袖式石室が小型化し、平面形が顕著な胴張り状を呈する石室も認められるようになる。石室の開口方向は西方向と南方向が混在する。この過程で羨門(立柱石)は退化、解消するが、若宮1号墳と同じく羨門立柱石を備えた古墳として窪地古墳がある。窪地古墳は前室(羨道)と後室(玄室)の平面形が一連の胴張り状を呈し、羨門立柱石がそのまま前庭側壁となる。なお、奥壁には2石を併置する。
- 高蔵寺3号墳 山の田古墳 穴田6号墳 それ以降、東山50号窯式期、7世紀前半にかけて、奥壁の大部分が1石か2石で構成される擬似両袖式石室を採用した古墳は、矢作川流域に加えて庄内川(矢田川・水野川)流域にも数多く分布するようになる。石室の開口方向は南方向が多くなる。矢田川流域の高塚山3号墳、塚原2号墳、塚原6号墳、水野川流域の四ッ谷3号墳、天白1号墳、穴田4号墳、庄内川流域の高蔵寺3号墳、山の田古墳などがその例である。なお、高蔵寺3号墳と山の田古墳は、相互に共通する構造上の特徴の一つとして、側壁の上位に大型の石材を使用する点が指摘されている(服部2000)。この特徴は若宮1号墳にも通じる要素である。
- 穴田6号墳 岩崎17号窯式期、7世紀中葉以降、擬似両袖式石室はさらに小型化し、胴張りも解消される。玄門立柱石は樹立されるものの次第に内側へ突出しなくなり、側壁に組み込まれるようになる(玄門が退化する)。このような変化の過程を示す例が水野川流域の穴田6号墳、穴田11号墳の横穴式石室である。両者とも奥壁に鏡石を据えるが、後者は鏡石と立柱石の退化が著しい。また、穴田6号墳の平面形は若宮1号墳とよく類似する一方、穴田11号墳はより小型で、奥壁側の両側壁が内傾し、形式的には穴田6号墳に後出する。なお、これらの石室は、開口方向が南東方向に偏する特徴も認められる。
- 以上の比較検討において、若宮1号墳の横穴式石室は6世紀中葉以降、矢作川流域において独自に発達し、6世紀中葉以降、周辺流域に展開した擬似両袖式石室の系譜を受けたものであることを確認した。詳細には、羨門の構造的特徴が窪地古墳に通じる一方、石室の平面形と開口方向は穴田6号墳に類似することから、横穴式石室の型式変遷上は6世紀中葉の窪地古墳を上限として、7世紀中葉の穴田6号墳を下限とする段階に位置付けられる。この理解は若宮1号墳の出土遺物からも支持されよう。

550
東山61号窯式

東山44号窯式

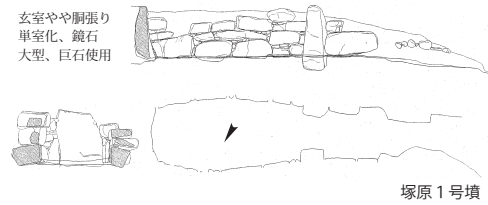
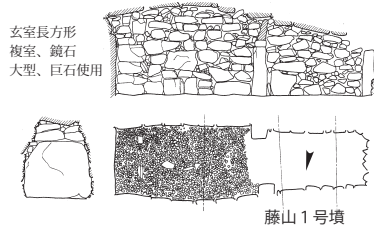
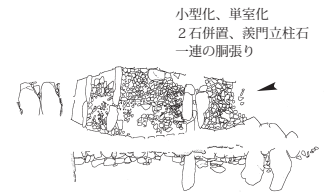
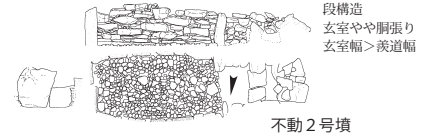
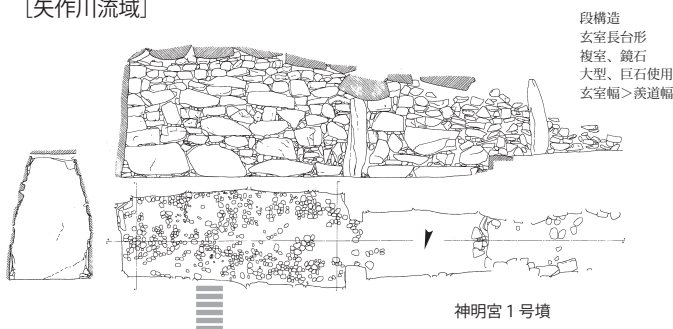
600

東山50号窯式

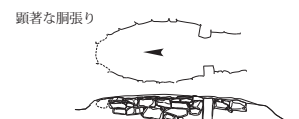
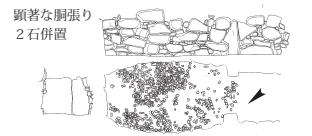
650

岩崎17号窯式

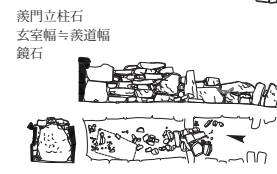
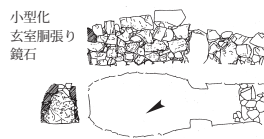
[矢作川流域]



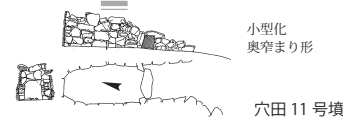
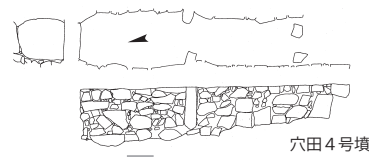
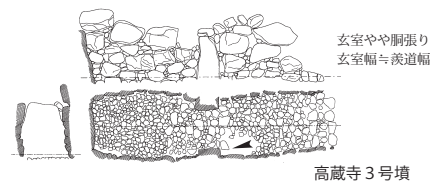
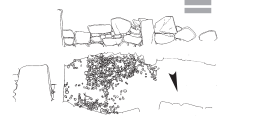
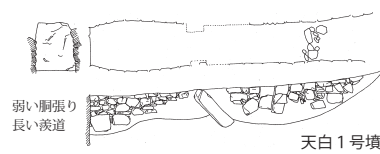
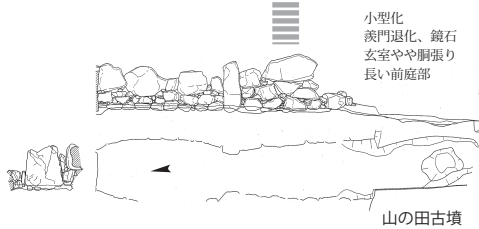
[矢田川流域]



[水野川流域]

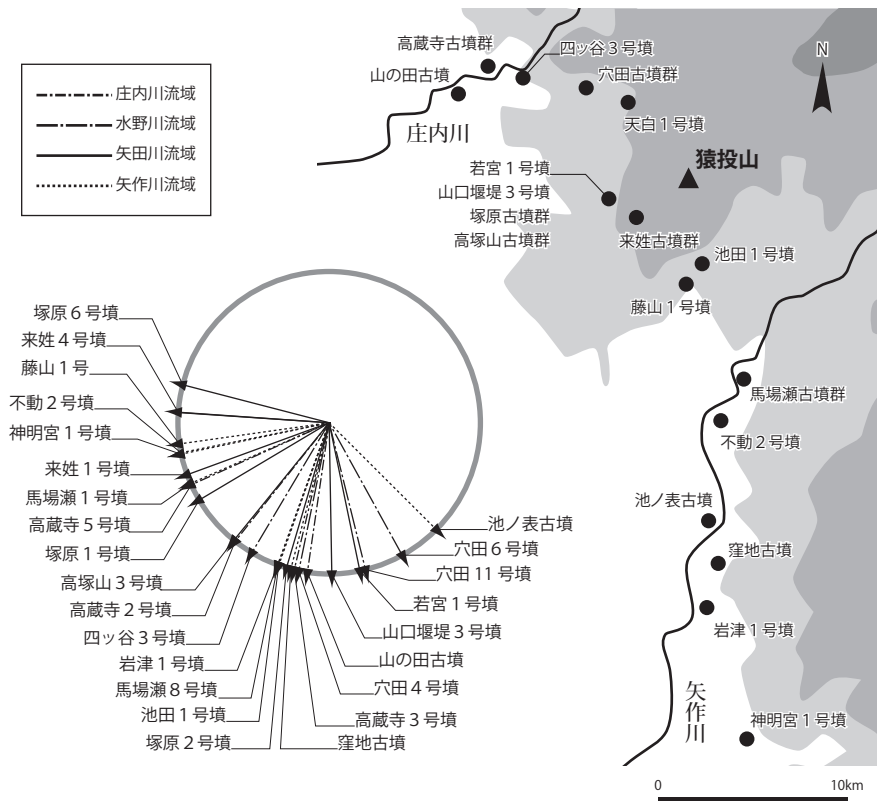


[庄内川流域]

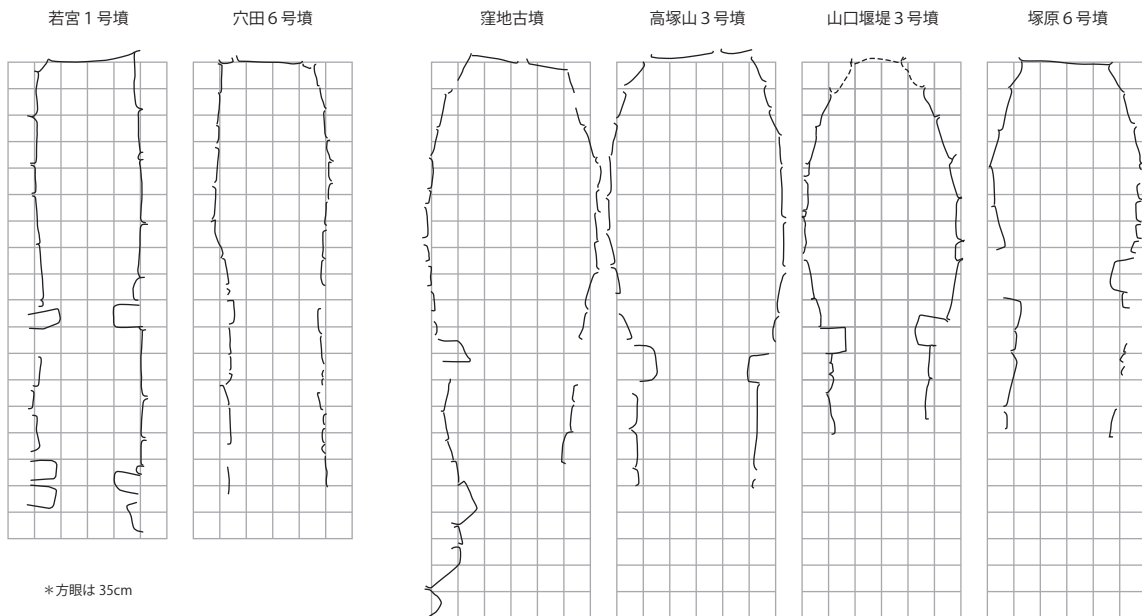


0 (1:250) 10m

第26図 擬似両袖式石室の系譜



第27図 関連する古墳の位置と石室の開口方向



第28図 石室の平面形の比較 (1:100)

一方、山口堰堤3号墳は、石室の残存が良好ではないものの、顕著な胴張りを呈する点に特徴がある。山口堰堤3号墳と同様、顕著な胴張り状を呈する擬似両袖式石室を埋葬施設とする近隣の古墳に高塚山3号墳と塚原6号墳がある。両者とも石室の平面形や規模が山口堰堤3号墳に類似するが、前者は玄室がより長大で、後者はより短小である。また、高塚山3号墳の平面形は矢作川流域の窪地古墳とも類似し、奥壁に2石を併置する構築方法も共通する。出土遺物から、窪地古墳が東山61号窯式期で6世紀中葉、高塚山3号墳と山口堰堤3号墳が東山61号窯式期から東山44号窯式期で6世紀後葉、塚原6号墳が東山50号窯式で7世紀前半の築造と推測されることを勘案すると、同系統の石室は矢作川流域の横穴式石室の系譜を受け、当地域においては玄室が短小化、縮小する方向へと変化したと把握される（第28図）。

山口堰堤3号墳

高塚山3号墳

塚原6号墳

以上、若宮1号墳と山口堰堤3号墳の横穴式石室横穴式石室の系譜をごく簡単に整理した。両石室は矢作川流域を中心として構造的に発達した擬似両袖式石室が周辺地域に伝播する過程を示す好適な例であることを改めて確認しておきたい。

文献

服部哲也2000「庄内川中流域の横穴式石室」『見晴台考古資料館研究紀要』第2号 見晴台考古資料館
 土生田純之1988「西三河の横穴式石室」『古文化談叢』第20集（上）九州古文化研究会
 森泰通2001「矢作川中流域における5・6世紀の横穴式石室の展開」『不動1・2号墳 山ノ神古墳 神明社古墳』豊田市埋蔵文化財調査報告書第16集 豊田市教育委員会

古墳文献

穴田古墳群：瀬戸市教育委員会1970『穴田古墳群』／瀬戸市教育委員会1973『穴田古墳群 第2集』／瀬戸市教育委員会1991『穴田第11号墳・種成第4号窯跡』／瀬戸市2005『瀬戸市史 資料編三 原始・古代・中世』
 池田1号墳：愛知県教育委員会1974『重要遺跡指定促進調査報告—地形測量調査の概要—』
 池ノ表古墳：豊田市教育委員会1995『池ノ表古墳』豊田市埋蔵文化財調査報告書第4集
 岩津1号墳：岡崎市教育委員会1964『岩津古墳群』
 窪地古墳：岡崎市教育委員会1976『窪地古墳・鳥ヶ根古墳』
 高蔵寺古墳群：春日井市教育委員会1974『春日井市遺跡発掘調査報告第6集』
 神明宮1号墳：愛知県教育委員会1974『重要遺跡指定促進調査報告—地形測量調査の概要—』
 塚原古墳群・高塚山古墳群：青木修2005「瀬戸市の古墳Ⅱ—矢作川流域の古墳群について（上）—」『研究紀要』第12輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター／財団法人瀬戸市文化振興財団2009『塚原古墳群』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告書第38集
 天白1号墳：瀬戸市教育委員会1991『穴田第11号墳・種成第4号窯跡』
 馬場瀬古墳群：豊田市郷土史研究会・豊田市教育委員会1977『豊田市埋蔵文化財調査集報第3集 古墳Ⅱ』豊田市郷土資料館報告10
 藤山1号墳：豊田市教育委員会1974『豊田市埋蔵文化財調査集報第1集 古墳Ⅰ』豊田市郷土資料館研究報告
 不動2号墳：豊田市教育委員会2001『不動1・2号墳・山ノ神古墳・神明社古墳』豊田市埋蔵文化財調査報告書第16集
 山の田古墳：守山市教育委員会1963『守山の古墳』／名古屋市教育委員会2010『山の田古墳発掘調査報告書』
 四ッ谷3号墳：瀬戸市教育委員会1962『瀬戸市四ッ谷3号古墳』
 来姓古墳群：猿投町史編纂委員会1969『来姓古墳群・上向イ田古窯址群』

第6章 まとめ

(1) 若宮1号墳

墳丘	古墳は南東に傾斜する丘陵斜面に立地する径10m程度の円墳である。周溝は明確ではなかったが、列石が部分的に残存する。
埋葬施設	埋葬施設は玄門（後室）と羨門（前室）を備える複室系擬似両袖式石室である。玄室と羨道の平面形は長方形を呈する。また、横穴式石室の壁体下半までを設置する深い墓壇が掘削されている。
出土遺物	出土遺物としては、墳丘背後において出土した須恵器高杯、羨道において出土した須恵器長頸壺とがあるのみで、数量は少ない。須恵器は猿投窯産と推測される。前者は東山44号窯式から東山50号窯式の前半（東山15号窯式）に相当し、後二者は東山50号窯式以降に相当する。
築造時期	古墳の築造時期は墳丘背後において出土した須恵器から6世紀後葉から7世紀前葉と推測される。また、羨道において出土した須恵器から7世紀前半以降まで追葬が行われた可能性も考慮される。一方、墳丘と横穴式石室の構築に労力を大幅に軽減する工法が採用されている点、石室が小型化している点、副葬品に乏しい点など、時期がより後出する要素も認められる。

(2) 山口堰堤3号墳範囲確認調査

墳丘	古墳は丘陵斜面の裾に立地する径14～15mの円墳である。範囲確認調査の結果、墳丘盛土や周溝など古墳の築成に関する情報は得られなかった。
埋葬施設	埋葬施設は玄門を備える擬似両袖式石室である。玄室の平面形は著しい胴張り状を呈し、奥壁付近が著しく窄まる。
出土遺物	出土遺物としては、範囲確認調査時に墳丘周囲から出土した須恵器蓋杯がある。須恵器蓋杯蓋は猿投窯産と推測され、東山61号窯式から東山44号窯式に相当する。
築造時期	古墳の築造時期は墳丘周囲において出土した須恵器から6世紀後葉と推測される。この推測は横穴式石室の形態から導かれる年代観とも整合する。
現地保存	山口堰堤3号墳は工事計画の変更によって事業地内に保存されることとなった。地元の方々の熱意と関係各位のご尽力に敬意を表したい。

(3) 結び

古墳時代後期 山田郡山口郷	若宮1号墳、山口堰堤3号墳を含めた周辺は、尾張地域においても古墳時代後期の古墳が比較的多く密集する数少ない地域の一つである。今回の調査の結果、古墳の群構成や築造過程についての知見が得られ、横穴式石室の構造から隣接する三河地域との交流関係の一端が明らかになったことは大きな成果である。一方、これらの古墳に対応する集落遺跡や生業基盤、後続する古代寺院については不明な点がなお多い。今後、古代山田郡山口郷に相当する当地域の社会の解明が進むことを大いに期待したい。
------------------	--

写 真 图 版



若宮1号墳遠景

若宮1号墳は南東に向かって傾斜する丘陵斜面に立地し、頂部よりやや下がった位置に構築される。



若宮1号墳全景

古墳は径10m程度の円墳であったと推測される。古墳の南東から東斜面の斜面の裾にかけては列石が残存する。



若宮1号墳墳丘

上段：若宮1号墳墳丘（丘陵側よりみる） 中段：若宮1号墳墳丘（斜面側よりみる）

下段左：墳丘南東から東斜面の列石 下段右：墳丘背後における須恵器高杯の出土状況（築造時期を示す。）



若宮1号墳横穴式石室検出状況

上段：横穴式石室石材検出状況 中段左：矢穴が穿たれた石材の出土状況 中段右：石材に穿たれた矢穴

下段左：羨道床面付近の炭化物の散在状況と石材の被熱状況 下段右：羨道床面における須恵器長頸壺破片の出土状況



若宮1号墳横穴式石室全景

上段：開口部（羨門）側より奥壁側をみる 下段：右壁側より左壁側をみる
（横穴式石室は玄門と羨道を備える複室系擬似両袖式石室である。）



若宮1号墳横穴式石室部分

上段左：奥壁と右隅角 上段右：奥壁と左隅角 中段左：左壁側の玄門立柱石 中段右：左壁側の羨門立柱石
下段左：玄門床面に認められる変色部分（木棺痕跡の可能性ある。） 下段右：玄門付近の石材（梱石と閉塞石の一部）



若宮1号墳横穴式石室の大きさの比較



若宮1号墳の墳丘断面と墓壇断面

上段：墳丘東側の土層断面 中段：墓壇東側の土層断面（墓壇の東側は比較的浅く、墓壇掘削時の排出土が盛られている。）

下段左：墓壇西側の土層断面（墓壇の西側は著しく深く、墓壇壁との空間はごく狭い。）

下段右：墓壇北側の土層断面（墓壇西側と同様、墓壇壁との空間はごく狭い。）



若宮1号墳横穴式石室解体状況

上段左：玄室床面上の礫を除去した状況

上段右：基底石と墓壙（長手積みされる基底石が多いが、奥壁手前と玄門手前の基底石は平積みされる。）

下段左：基底石下の土坑と支い石（大型の石材を安定して据えるための造作）

下段右：墓壙（丘陵側の右壁側が著しく深く、斜面側の左壁側は墓壙掘削時の排出土が盛られる。）



若宮1号墳出土遺物

1：墳丘背後より出土した須恵器高杯 2：羨道床面より出土した須恵器長頸壺



山口堰堤3号墳範囲確認調査1

上段：T.T.01（主軸上の墳丘南側斜面に設定）

中段：T.T.02（主軸に直交する方向の墳丘西側斜面に設定）

下段：T.T.03（主軸上の墳丘北側斜面に設定）



山口堰堤3号墳範囲確認調査2

上段：T.T.04（主軸に直交する方向の東側斜面に設定） 下段：T.T.05（東側斜面が張り出す位置に設定）



山口堰堤3号墳範囲確認調査出土遺物

1：T.T.05出土須恵器蓋杯蓋 右：その他出土遺物



山口堰堤3号墳遠景
事業地内に現地保存
された状態



山口堰堤3号墳近景
墳丘には孟宗竹が一
面に繁茂する。



山口堰堤3号墳横穴式石室
横穴式石室測量時の状態

横穴式石室合成写真
(株式会社CUBIC作成)



横穴式石室全景



左：奥壁側から開口部方向をみる（玄室は胴張りが著しい。）

右：開口部側から奥壁方向をみる（羨望は直線に近い。）



山口堰堤3号墳横穴式石室部分写真1

上段左：玄室右壁（奥壁側から玄門側をみる） 上段右：玄室左壁（奥壁側から玄門側を側をみる）

中段左：玄室右壁（玄門側） 中段右：玄室右壁（奥壁側） 下段左：玄室左壁（玄門側） 下段右：玄室左壁（奥壁側）



山口堰堤3号墳横穴式石室部分写真2

上段左：羨道右壁 上段右：羨道左壁 中段左：右壁側玄門立柱石（玄室側より） 中段右：左壁側玄門立柱石（玄室側より）
下段左：玄門（玄室側より） 下段右：奥壁付近（奥壁は抜き取られるが、著しく窄まることが確認できる。）

報告書抄録

ふりがな	つかはらいちごうかまあと わかみやいちごうふん やまぐちえんていさんごうふん
書名	塚原1号窯跡 若宮1号墳 山口堰堤3号墳
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第169集
編著者名	川添和暁・宇佐見守・藤根 久・小林克也・伊藤茂・尾崎大真・丹生越子・廣田正史・小林紘一 Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani 早野浩二・黒沼保子
編集機関	公益財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802-24
発行年月日	西暦2012年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つかはらいちごうかまあと 塚原1号窯跡	せとしわかみやちょう 瀬戸市若宮町	23204	03284	35度 20分 38秒	137度 11分 17秒	200608～ 200703	1,240㎡	国道248号線 道路改良工事に伴う事前 調査
わかみやいちごうふん 若宮1号墳	せとしわかみやちょう 瀬戸市若宮町	23204	03872	35度 20分 43秒	137度 11分 20秒	200608～ 200703	270㎡	
やまぐちえんていさんごうふん 山口堰堤3号墳	せとしわかみやちょう 瀬戸市若宮町	23204	02108	35度 20分 28秒	137度 11分 16秒	200608	50㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
塚原1号窯跡	窯業遺跡	中世	窯体2・整地層(面)・灰原	古瀬戸類陶器片・山茶碗類陶器片	窯体1基は調査中に発見。 (塚原3号窯跡)
		近世	土坑墓	播鉢など近世陶器	
若宮1号墳	古墳	古墳	横穴式石室・列石	須恵器	横穴式石室は複室系擬似両袖式石室で羨門までが遺存する。
山口堰堤3号墳	古墳	古墳	横穴式石室	須恵器	範囲確認調査の結果、古墳は現地保存された。

文書番号	発掘届出(18埋七第33号・18.8.7/18埋七第33号・18.8.7/17埋七第122号・18.3.16) 通知(18教生第1274号・18.9.25/18教生第1274号・18.9.25/17教生第2457号・18.3.31) 終了届(18埋七110号・19.3.27/18埋七第111号・19.3.27/18埋七第38号・18.8.22) 保管証・発見届(18埋七110号・19.3.27/18埋七第111号・19.3.27/18埋七第38号・18.8.22) 鑑査結果通知(19教生第465号19.5.23/19教生第464号19.5.23/18教生第1304号・18.9.25)
------	---

要約	塚原1号窯跡の調査では、13世紀代の窯体・作業場・灰原を全面調査できた。特に1号窯の残存状態は良好で、天井の残存や焼台痕の確認など、窯体の構造を考える上で重要な調査事例となった。また、調査中に塚原3号窯跡も新たに見つかり、1号窯跡との関係を詳細に検討することができた。報告では、遺跡形成過程の基礎データを提示するとともに、製品としての陶器の生産から廃棄にいたるまでの様相を検討することができた。 若宮1号墳は径10m程度の円墳で、横穴式石室を埋葬施設とする。古墳は6世紀後葉から7世紀前葉頃に築造されたと推測される。 山口堰堤3号墳は径14～15mの円墳で、横穴式石室を埋葬施設とする。古墳は6世紀後葉に築造されたと推測される。古墳は現地保存。
----	--

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第169集

塚原1号窯跡 若宮1号墳
山口堰堤3号墳

2012年3月31日

編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 新日本法規出版株式会社